オレとゆー君と召喚獣

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オレとゆー君と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ６５４９Ｙ

【作者名】
那家乃ふゆい

【あらすじ】
新学期が開始して二日目。文月学園に一人の転校生がやってきた。『オレ』という一人称ながらも大人しい雰囲気を持った彼は、あろうことか学年最底辺のＦクラスへと転入することに。しかし、彼はそこで懐かしい旧友との再会を果たすのだった。「お前……雪冬か？」「もしかして……ゆー君？」打倒Ａクラスを胸に掲げ、彼らは今日も学園中を駆け抜けていく。

第一問（前書き）

こんにちは。知っている人は久しぶりです。
ふゆいと申します。
今回は新たにバカテスの二次創作です。
まだまだ至らないところもありますが、誠心誠意頑張ろうと思いますので、応援よろしくお願いします。

それでは、お楽しみください。

第一問

「すごいなぁ……桜ってこんなに綺麗だったっけ」

長々と続く桜並木を、通学鞄を肩にかけて歩きながら、少年は一人呟く。

（中学校のときも桜は見たけど……ここまで見事な咲き方はしてなかったなぁ。やっぱり地方によって見栄えが違うのかな？　桜って不思議）

飽きることなく桜を見続けつつも、黙々と正面玄関へと向かう。

（お母さんに聞いた限りだと、あそこで手続きができるはずなんだけど……この学校広すぎるよ……。どこが正面玄関か分からないんだけど）

もうかれこれ三十分はこの近くをうろうろしている。どうやらこの少年、生粋の方向音痴のようだ。

「……どうしたの？」

「え？」

少年が周囲をキョロキョロ見回していると、そんな彼を不思議に思ったのか、一人の少女が彼に話しかけてきた。

日本人形のような美しい黒い髪を、腰のあたりまで伸ばしていて、まさに【大和撫子】って感じの綺麗さ。手足も身体もすらっと細くて、それでいて凹凸はしっかりしている。一言で形容するなら【美

人】以外の何物でもない。

（うわぁ……綺麗な人だなぁ……）

そんな素直な感想を浮かべながらも、彼は話しかけてきた少女の方に向き直る。

「あ、すみません。ちょっと正面玄関を探しているんですけど、迷っちゃって……」

「……迷った？　もしかして、転校生？」

「あー、うん。そうなんですよ。昔はここら辺に住んでいて、五年ぶりに帰ってきたんです。それで、割と近所のこの学校に転入することになって……」

「……そう。五年ぶり……あれ？」

はた、と急に少女が動かしていた足を止めた。少女の不意の行動に、少年はコクンと首を傾げる

疑問符を浮かべる彼を他所に、少女はまじまじと少年の全身を値踏みするかのように見つめ始める。

（うー、なんなのさ……めちゃくちゃ恥ずかしいんだけど……）

人に注目されるのが苦手な彼にとって、同年代の少女、しかも美少女に見つめられるのは、なかなかに過酷な試練だった。

「あ、あのぉ……どうしたんですか……？」

「……人違いだったら、ごめん。でも、質問していい？」

「え？　あ、はい。構いませんけど……」

思わずと言った様子で少年は少女に尋ねる。

少女はあちこちに視線を泳がせながら、ボソボソと小さめの声で呟いた。

「……貴方……もしかして、雪冬（ゆきと）？」

「……え？」

思わず、固まる。

（なんでこの人がオレの名前を……？　って、アレ？　この人、よく見るとどっかで会ったことがあるような――――――――）

「も、もしかして、霧ちゃん！？」

「……うん。五年ぶり」

「あははっ、ホントに久しぶりだねっ」

（ま、まさか霧ちゃんだったなんて……小学校以来だから全然分からなかったよ……。こんなところで旧友と再会できるなんて、世の中は何が起こるか分からないね……）

思いがけずも再開した、懐かしの友人。五年もたっているのにも関わらず、よくもまぁ自分だと認識できたものだ。本当、世の中というものは面白い。

「……最初は全然分からなかった。背も伸びてるし、髪も長くなってる」

「それは霧ちゃんもだよ。昔から綺麗だったけど、今はずぅっと美人さんじゃない！」

「……ありがとう。そういうところは、昔から変わらない」

「あ、あれ？　そうかな？」

（確かに昔から人を褒めるのは好きだったけど……そこまで変化がないかな？）

苦笑いを浮かべ、頬を恥ずかしそうに掻く少年――――雪冬。昔の自分を引き合いに出されたことで、羞恥という名の感情が彼の全身を支配していた。

「……全然、変わってない」

「そ、そう言われると少し情けない気もするけど……。……あ、そういえば【ゆー君】は？　一緒の学校に通ってるんじゃないの？」

懐かしい親友の名前が頭に浮かんだので、雪冬はそのまま口にする。昔は二人とも（彼的には）仲が良かったから、今も親しくしているのだろうか。

期待を胸に尋ねる。しかし、霧ちゃん――――霧島翔子は少し寂しげな表情になると、苦笑いをした。

「……雄二もここには通っている。でも、今は少し疎遠気味。あんまり話す機会がない」

「あ……そうなんだ……」

「……うん。でも、雪冬が気にすることじゃない。もうすぐで、解決するはず」

「そ、そうだね。いつまでも引きずってても仕方がないしね！」

無理やりに元気を引きずり出し、大声を上げる。こんな暗い気持ちの時には元気が一番だと相場が決まっているのだ。

雪冬の不器用な元気に、翔子は我慢できずに口元を抑え控えめに笑った。

「……ふふっ」

「？　どうしたのさ、霧ちゃん」
「……そういうところも、相変わらず」
「う……き、霧ちゃん。恥ずかしいからやめようよそういうのは……」

結局雪冬は、目的地である正面玄関に着くまでの間、翔子に弄られ続けたのだった。

☆

「……それじゃ、私はこっちだから」
「うん。またねっ」

三階に上がり、別れ道である渡り廊下へと着いた雪冬達。どうやら翔子はＡクラスと呼ばれる教室に属しているらしく、そのまま新校舎の方へと歩いて行ってしまった。
廊下の向こうへと消えていく翔子を見送ってから、ふぅ、と溜息をつく。

「……さぁて、オレは旧校舎だね」

手渡された資料を読みながら、教室へと進んでいく。

彼が所属するところはFクラス。転校生でまだ学力審査が終わってないことから、そこに入ることが決まったようだ。

「えーと、男子が四十人超で女子が二人……なんか危険じゃない？　Fクラスって」

（そんな飢えた状態の男子の中に女子を入れるなんて……まるで「食べてください」と言わんばかりじゃないか。オレならすぐにでも逃げ出すと思う。

そして、この観察処分者っていうのはなんなんだろ？　資料には学園一の問題児って書いてあるけど……なんでわざわざ特殊な呼称を付けるのかな？　流行り？）

世間一般とは明らかにかけ離れた状況。今まで聞いたこともない単語に、雪冬はわくわくした気持ちを隠せなかった。今もぎゅっと握りしめた拳がプルプルと震えている。

「……っと、そんなこと言ってる間に着いちゃったね。……ていうか、これは学校としてセーフなの？」

目の前に現れた教室を見て、彼は思わず溜息をつく。

（ドアがボロボロの木製っていうところからヤバそうなのに、室札は割れてるし、窓ガラスにはテープがいっぱい貼られてるし……学び舎として成り立っているのかな？）

「まぁ、気にしても仕方ないんだけどね」

文句をたらたら並べたところで、環境が改善されるわけでもない。ここは腹をくくって受け入れるべきだろう。幸運なことに、雪冬は

順応性抜群の少年だ。たとえ教室がどんな状況だって、過ごしていける自信と実力を兼ね備えている。……実力、というのは少し理解できないが。

「……よしっ」

すーはーと大きく深呼吸。転校生は最初のツカミが肝心だ。失敗してしまったらこれからの学校生活に大きな支障が出るかもしれない。

（ここはノリと勢いで乗り切ろう……！）

パァンっと自分の両頬を平手打ちし、気合を入れる。これも転校生の醍醐味というものだ。自分の協調力が試されるとき。雪冬の心の奥底で今世紀最大の闘志の炎があがった。

「イチ、ニーの……サンッ？」

ガラッ

「おはようございまーす？」

『『『……はい？』』』

突然ドアが開いたことに驚いているのか、教室中の視線が彼を串刺しにする。

（う、うぅ……緊張するなぁ……）

どうやら今はホームルーム中だったようだ。初老の男性教師が、教壇に立って司会を務めている。

教師は雪冬に気が付くと、やんわりとした態度で彼を招き入れる。

「あぁ、君は先ほど職員室で報告のあった生徒ですね？　とりあえず、ここにきてもらえますか？　紹介から始めたいと思います」

「あ、はい！」

畳が敷き詰められた床をとてとてと教卓まで歩く。なぜか一歩踏み出すごとに畳が抜けそうな感覚になるが、きっと気のせいだろう。

あまりにも辛辣な教室状況に冷や汗を浮かべながらも、ようやく教壇に到着し、改めてクラスメイトの方を向く。

そんな雪冬を微笑ましそうに見ながら、先生は彼の軽い紹介を始めた。

「えー、新学期が始まって三日が経ちましたが、今日から皆さんに新しい仲間が増えます。皆さんも突然すぎて驚いていると思いますが、仲良くしてくださいね？」

すっ、と周りから気づかれないくらいの強さで先生が彼の背中を押す。

（わ、もう出番なの!?　ま、まだ緊張が取れてないのに……）

ドキドキする胸を必死に抑えつつも、再び前方を見る。

多少個人差はあれど、同様に笑顔で彼の方を見るクラスメイト達。

突然現れた雪冬を、受け入れようとしてくれているようにも感じる。

（あ……この人たち、根本的な部分で優しいんだ……）

気が付くと、あれだけ激しく鳴っていた心臓が、静かになっていた。いつのまにか肩の荷も下りているようだ。

――――よし。

「え、えーと、時雨雪冬（しぐれゆきと）って言います。お父さんの都合で五年ほどこの町を離れていましたが、今年になって帰ってきました。こんなタイミングでの転入で、右も左も分からない未熟者ですが、どうかよろしくお願いします」

ペコリ、勢いよく頭を下げる。そして、二・三秒ほどの静寂が教室を包み込んだ。

（あ、あれ……失敗しちゃったかな……？）

心配になり、そのまま顔を上げられず俯く。

（うぅ……やっぱりダメだったの……？）

一人絶望感に打ちひしがれる雪冬。やはり草食系には成功できなかったのだろうか……。しかし、そんな彼の不安を打ち消すように、誰かの叫び声が突然雪冬の耳へと届いてきた。

「雪冬……お前、本当に雪冬か！？」

「え……？」

予想外の言葉に彼は思わず顔を上げ、声の主を見つめる。

教室窓際後方から二番目の席。百八十センチほどの背丈に加えて、がっしりとした身体が健康さを物語っている。そして何よりも特徴的なのは赤っぽい色のたてがみヘアーだろう。狼のような人だ。

残念ながら、雪冬の記憶にこんなガタイのいい知り合いはいない。

しかし、その人を見た瞬間、彼の脳裏にはとある一人の人物が浮

かび上がっていた。

（え……嘘でしょ……まさか……）

「ゆー君、なの……？」

雪冬の言葉に、その少年はゆっくりと頷いたのだった。

第二問（前書き）

こんにちは。ふゆいです。
やっと二話目を更新。出来る限り連続投稿で頑張ります。
それではお楽しみください。

第二問

「いやぁ、まさか偶然にもゆー君と同じクラスになるとはね。神様も悪戯が過ぎるよ」
「それはこっちの台詞だ。五年もかけて再開するなんて、どこのライトノベルだっての」

あはは、笑い合う二人。
若干紆余曲折はあったものの、無事に自己紹介を終えた雪冬は、先ほど感動の再会を果たした少年、坂本雄二と雑談に花を咲かせていた。

「ゆー君、なんか格好良くなったよねぇ。身体も大きいし。オレはまだ全然身体の発育も進んでないのに……ずるいや」
「いやいや、お前がここまででかくなったら逆にドン引きだって。草食系男子は小せぇぐらいが丁度いいんだよ。だから、お前はそのままでいい」
「うー……オレのコンプレックスを褒めないでよぉ……」

むー、と頬を膨らませる雪冬。雄二がしたら吐き気しか催さないが、彼がすることで一種の癒し効果が教室中に満ち溢れていた。現に、クラスの八割はお茶をずずずと啜りながらほんわかした表情でそちらを見つめている。というか、いつのまに用意されたのだろうか。

「え、えっと……雄二、そろそろその子の説明をお願いしたいんだけど……」

「ん？　あぁ、お前らは初対面だったな」

目の前で展開されている幼馴染ムードに引き攣った笑みを浮かべつつも、どこか抜けた感じの少年――――吉井明久が雄二に話しかける。

明久の周りにいた者たちも同様にコクコクと頷いていた。恐るべき団結力。正体不明の少年を前にして、今Ｆクラスの心は一つになった。

「コイツは時雨雪冬。俺の小学校時代の幼馴染で、一番仲が良かったと言ってもいいくらいの親友だ。友達の少なかった俺になにかと懐いてきてな……」

「ち、違うよ！？　懐いていたんじゃないって！　オレは単にゆー君と気が合ってただけだよ！　そんな弟分みたいな関係じゃ……」

「……なるほど、そういう子なんだね」

「まぁそんな感じだ」

「なんかあらぬ方向で納得されてる！？」

ガーン、という効果音が付きそうな表情で落ち込む雪冬。そんな彼に苦笑いしながらも、雄二は明久達の紹介を進めていく。

「こいつは吉井明久。俺の悪友で、文月学園一のバカだ。観察処分者とも言われている」

「ちょ、雄二！　よりによってバカ扱いは酷くない！？　そりゃあちょっと人より勉強は苦手だけどさ……学園一ってほどじゃないと思うよ！？　ねぇ皆！」

「「「……（ふいっ）」」」

「畜生周知の事実か！」

「……うん、なんとなくどんな人か分かった気がするよ。よろしくね、アキくん」

「……なんかその呼ばれ方は特定の危険人物を思い出すんだけど……ま、いいや。こちらこそよろしく」

お互い笑顔で握手をする二人。なんだか似たものオーラで包まれている気がするのは気のせいではないだろう。今ここに、明久二号が誕生した瞬間だった。

「……バカが増えたな」
「「ん？　なにか言った？」」
「いやなにも」

雄二の失言もどこ吹く風。鈍感、難聴、草食と、ある意味三拍子そろった二人が完成した。
明久に続くように、残りの生徒達も自己紹介を行っていく。

「……土屋康太。趣味はとうちょ……なんでもない。特技はとうさ……特にない」
「うん。趣味は盗聴で特技は盗撮だね。ちょっと変な趣味だけど、どんな写真を取り扱ってるの？」
「……これ」

疑うことを知らない雪冬に、康太は素直に自前の写真を取り出す。そこに写っていたのは一人の女生徒。なぜか近くに立っている男子生徒と瓜二つな、少し強気そうな美少女だ。
それはどうやら体育の時間のようで、少女は文月学園指定の体操服に身を包み、ペアの生徒と柔軟体操をしているところだ。身体を捻ることで通常ではあり得ない露出と濡れが見えている。肢体に浮かぶ汗がなんとも健康的で美しい。

「……自信作」

自慢げに胸を張る康太。どう見積もっても確実に犯罪レベルなのだが、誰も気にしてない様子。大丈夫か文月学園。プライバシー保護の重要性をひしひしと感じる。

「……す、すごい……！」

しかし、この少年もまた普通ではなかったようだ。盗撮写真を見て歓喜の表情を浮かべている。ここにまた一人、彼を尊敬する信者が出現した。ムッツリ商会今日も商売繁盛。

結局そのままお買い上げ。どうやらその少女は雪冬のストライクゾーンど真ん中だったようで、彼は大事そうに写真を財布の中に入れた。第二話にして早くもキャラがぶれ始めている主人公。この作品の崩壊も近いかもしれない。

「ワシは木下秀吉。今お主が買った写真の少女の双子の弟じゃ。よろしく頼むの」

「へぇっ。だから女の子みたいに可愛いんだね。オレ最初は女だと思ってたよ」

「そうじゃ、ワシは男じゃぞ？　決して女ではない。ましてや性別【秀吉】でもない。男なのじゃ……」

「ど、どうしたの！？　なんか黒いオーラがっ」

「放っておいてやれ、雪冬。秀吉にもいろいろあるんだよ」

「う、うん……」

男じゃ、男なのじゃ……とトラウマ全開で座り込んでしまった秀吉に、苦笑いを隠せない雪冬。願わくば常識人が現れてくれることを祈りつつ、次の生徒へ。

「ウチは島田美波。ドイツからの帰国子女なの。趣味は……アキを

ボッコボコにすることよ♪」
「待つんだ美波。二日前より趣味に磨きがかかってない！？」
「なるほど。アキくんと島田さんはそういう関係なんだね」
「違う！　なんか双方の合意の上で成り立っているような流れだけど僕はこれっぽっちも肯定してないんだ！」
「大丈夫だよアキくん。……世の中には色んな趣味の人がいるんだから」
「誤解だぁ――――――――――――――っ？」

哀れ吉井明久。必死に弁明をしようと試みるが純粋すぎる雪冬は既に美波の話を信じてしまっている。今頃雪冬の脳内では明久の欄に【マゾヒスト】と書かれてしまっていることだろう。

「最後は私ですね。姫路瑞希ですっ。よろしくお願いしますね」
「あ、うん。よろしく」

桃色ロングの巨乳少女が礼儀正しくペコリと頭を下げる。釣られて、雪冬も慌ててお辞儀を返した。ようやく常識人が現れようだ。落ち着いた雰囲気の少女は綺麗な笑顔で雪冬の方を見ている。

「えーと、私は皆さんみたいな特技はないんですけど……趣味は料理です♪」
「へぇっ、料理かぁ……オレ、料理ができないから、そういうの憧れるんだよね。よかったら、今度教えてくれない？」
「はい、いいですよ？」
「「ちょっと待った？」」
「へ？　どうしたのさ、みんな」

平穏無事な会話を繰り広げていた二人を邪魔するかのように大声を出す雄二達。というか男子勢。なぜかその顔は青ざめているよう

にも見えるが、どうしたのだろうか？
首を傾げる雪冬に、雄二達は最大音量の小声という器用な方法で怒鳴ってくる。

（悪いことは言わん！　姫路から料理を習うのだけはやめとけ！）
（え？　なんでさ。いい人じゃないか。きっと料理も上手いんでしょ？）
（確かに一般常識で考えれば上手いとは思うけど……姫路さんは独特すぎるから危険なんだよ！）
（料理に化学薬品を用いるくらいじゃからの）
（え、えー……それって、料理って言えるの？）
（……化学薬品）
（な？　だから、アイツに習うのだけは、本当にやめておけ。これ以上必殺料理人が増えるのだけはなんとしてでも避けたい）
（う、うん……）
「あ、あのー……どうかしたんですか？」

突然内緒話を始めた男性陣に、瑞希は疑問符を浮かべる。自分の料理を他人に教える機会ができるのを妨害されたせいか、少し不機嫌そうだ。

「い、いや、すまんが姫路。雪冬に料理を教えるのはまた今度ってことでいいか？」
「え？　どうしてですか？」
「姫路さんに習う前に少しでも腕を上げておくんだって！　ほ、ほら、姫路さんは料理が上手でしょ？　だから、足手まといにならないようにするんじゃないかな！？」
「……雪冬は他人思い」
「じゃから、の？　少し我慢してくれ」
「む～……仕方ありませんね……」

「ご、ごめんなさい……」

男子勢の決死の説得により、殺人犯増加をなんとか食い止めることに成功。今日もFクラスの平和は守られた。非常にやりきった表情をしているのが印象的だ。

まぁなにはともあれ、これで自己紹介も無事終了。他のクラスメイト達も一応名前とかを言ってから、事態は落ち着きを取り戻した。

「……さて、それじゃ準備をするかな」

「準備？　今からなにかあるの？」

雄二の言葉をきっかけに、クラスメイト達がばたばたと動き回っていく。卓袱台を廊下側に寄せ、今にもバリケードとして機能しそうな並べ方だ。

突然なにが始まったのか、雪冬は雄二に尋ねる。

雄二は「あぁ」となんでもないように頷いた。

「お前はまだ転校してきたばっかりで知らなかったな。俺達は今、とあるクラスと戦っているんだよ」

「戦う？　それって、パンフレットに書いてあった【試験召喚戦争】ってやつ？　確か、この学校で試験的に使われている、【召喚獣】を使役して戦うって言う……」

「そう、その【試召戦争】さ。各クラスの名誉と威信をかけて、全生徒が全力を以てして凌ぎを削る。まさに学生版の戦争」

「でも、まだ新学期が始まって三日目だよね？　なんでこんな早く戦争を……」

「別に、大した意義はない。ただ、Aクラスの設備が欲しいだけ。今は、それに辿り着くための道程ってところだ」

そこで一旦言葉を切る。そして、雄二は野生児じみた笑みを浮か

べると、楽しそうな表情で言い放ったのだった。

「学年で二番目の強さを誇る、【Bクラス】との試召戦争さ」

第二問（後書き）

雪冬（以下：雪）「ゆっきーちゃんねるぅー？」
雄二（以下：雄）「……」
雪「すめらっぱぎー！　時雨雪冬です！」
雄「……いや、なんだこのコーナー」
雪「もう、ノリが悪いなぁゆー君は。こちらはアシスタントのゆー君こと坂本雄二です！」
雄「……まぁ、よろしく」
雪「さて突如始まりましたこのコーナー！　このコーナーは本作品【オレとゆー君と召喚獣】をより深く楽しんでもらおうと立ち上げられた、いわゆる補足コーナーなのです！」
雄「ずいぶんとぶっちゃけたな。ていうか、こんな序盤から補足なんているのか？」
雪「いやまだいらないよ？　でも、次回からは召喚獣関係とかでいるじゃない？　だから、一応顔見せ程度に」
雄「なんという適当……作品が普通だから後書きで取り返そ……」
雪「ゆっきーパンチ？」
雄「あべしっ！」
雪「ふぅっ。そんなこと言うゆー君はおねむの時間だよ」
雄「……（ぐったり）」
雪「さて、次回から本格的に始動する【ゆっきーちゃんねる】ですが、当コーナーでは様々な質問や要望、感想をどしどしお待ちしています！　送ってくれると作者の執筆速度も跳ね上がるかも！」
雄「……」
雪「さて、それじゃ次回、お会いしましょう。バイニー？」

第三問（前書き）

こんにちは。ふゆいです。

今日もなんとか無事に更新できました。やっぱ趣味っていいですよね。

さて、今回はついに雪冬の召喚獣が登場。これぞバカテスの醍醐味です。

詳しい情報はあとがきの【ゆっきーちゃんねる】にて報告します。

それでは、どうぞ～♪

第三問

Bクラスとの試験召喚戦争。
それは普通に考えると、無謀以外の何物でもなかった。

「び、Bクラスって……本当にオレ達で勝てるの？　オレ達のクラスって、学年最低ランクなんでしょう？」
「なに、心配はいらない。もう既に策は立ててある。お前も、俺の頭の良さは知っているだろう？」
「それは……そうだけど……」

昔から神童として名を馳せていた雄二。常に隣にいた雪冬がその二つ名を知らないわけがない。
しかし……そのためにいくつかの過ちを犯してしまったのもまた事実。雪冬の脳裏には、悲しそうな表情をした翔子と雄二の姿が浮かんでいた。
そんな彼の思いを感じとったのか、雄二は笑いながらポンと雪冬の頭に手を乗せる。

「大丈夫だ。あの時みたいな失敗は繰り返さない。これ以上、俺の周囲の奴らを傷つけてたまるかってんだ。俺は持てるすべてを以てして仲間を守り抜くさ」
「……うん、そうだね。ゆー君はそういう人だよ」

そう。どれだけ月日が経とうとも、どれだけ時間が過ぎようとも、

坂本雄二という人物は他人の痛みがわかる人間だ。神童と崇められていた小学校時代でさえ、多少不器用ではありながらも翔子や雪冬のことを気にかけてくれていた。そういう部分では、誰よりも包容力のある男だと言えよう。

（……まぁ、だからオレが惚れたんだけどね）

自嘲気味に笑う雪冬。一応断っておくが、この小説にボーイズラブ要素はない。基本的にノーマルな小説であって、決して腐女子要素は込められていないのだ！

『坂本代表！　Bクラスの先遣部隊が出動しました！』

「そうか、わかった。……さて雪冬。そろそろ覚悟と度胸を用意しろよ？」

「え？　それって、どういう……」

「なぁに、そんなに難しいことじゃない。簡単なことさ」

ニヤリと妖しい笑いを浮かべる雄二。何故だかは知らないが、突然雪冬の身体には形容しがたいほどの寒気と悪寒が走った。これぞ主人公補正。自分の身に降りかかる災難には敏感な反応を見せる。

しかし、それに気付いたとしても確実に巻き込まれるのも主人公というもの。雄二は笑顔を浮かべたまま、雪冬にこう言い放ったのだった。

「雪冬。お前の文月学園試験召喚戦争の、デビュー戦だ」

「……はい？」

静かになった教室に、廊下の喧騒が一際大きく響き渡った。

☆

「あ、アキくん！」
「え？　――――って、雪冬!?　なんでこんなところに！」

Bクラス前の廊下にて姫路瑞希の指揮の下戦闘を行っている明久達。戦力で劣る彼らは防戦一方だが、操作技術に長ける者たちを集めているため、互角以上の戦いを見せていた。
そんな中に現れたド素人の雪冬に、副部隊長の明久は思わず声を荒げる。

「雪冬はまだ召喚獣使ったことないんでしょ!?　こんな混戦状態の所に来たら、一瞬で戦死しちゃうよ！」
「そ、そう言われても……ゆー君がオレに『お前ならやれるさ。俺の期待に応えてくれよ？』って……」
「畜生あの馬鹿なに考えてるんだ！　奇跡でも起きない限り難しいだろ!?」

普通ならば小学生でもわかる。神童の雄二ならば尚更だ。それなのに、何故素人の雪冬を戦場に赴かせたのだろうか。

（とにかく、早く教室に返さないと――――）

撤退を、そう叫ぼうとした明久だったが、

『Ｂクラス柴田がＦクラスの転校生に勝負を申し込みます！　試験召喚（サモン）？』

「え、えぇっ！？」

「くそっ！　もうこんなところにまで敵が！」

突如現れたＢクラス生徒に、動揺する雪冬。予想外の事態に、明久は素直に感情を露わにする。

「雄二のバカ野郎！　何考えてんだ？」

「え、えっと……アキくん、こういう場合はどうすれば……」

「あぁもう！　とにかく召喚して！　話はそれからだ？」

「あ、うん！　さ、試験召喚！」

「僕も一応助太刀を！　試験召喚？」

呼び声に応じて、二人の足元に幾何学的な模様の魔方陣が現れる。それは瞬時に光を放ち、雪冬達の足元に小さなヒトガタを形成した。

そして現れる二人の召喚獣。

「……よしっ」

明久の召喚獣はいつも通りの改造学ランと木刀。どこの不良だとツッコミたくなる容姿の最弱召喚獣だ。

「……今なんか誰かに馬鹿にされたような気がするんだけど……」

気のせいです。

「え、えっと……オレのは、コイツかな……？」

控えめに自分の足元を見る。そこにも明久のと同じような召喚獣がいた。
西洋の甲冑に身を包み、周囲に銀色の光を放っている。それほど輝かしい鎧だ。
……しかし、その甲冑召喚獣がドでかい盾しか持っていないのは、どういう了見だろうか。戦いの術があるのか、果たして。

「え、ちょっ……武器もってないじゃん！」
「オレに言われても……でも、木刀に比べればマシだと思うけど。金属製だし」
「それを言われるとこっちも言い返せないけどさぁ……」

はぁ、と二人肩を揃えて溜息をつく。だがそんなことで敵は見逃してくれない。例の如く、三下よろしく雄叫びを上げながら突っ込んでくる。

『チェストォ――――――――ッ？』
「くっ、よいしょぉおおおお？」

ガキン？　と金属同士がぶつかり合い、甲高い音が上がる。Ｆクラスレベルなら一瞬で押されそうなものなのだが……、

「なっ！　なんで俺の召喚獣が圧されてんだよ！？」
「オレが……知るわけないだろ！」

Ｂクラスを相手にしているにも拘らず、雪冬の召喚獣はじりじりと相手をその巨大な盾で押し返していた。
予想外の事態に驚く明久達。そんな彼らの疑問に答えるように、二人の点数が表示される。

『Ｂクラス　柴田亮平　ＶＳ　Ｆクラス　時雨雪冬
日本史　１６８点　ＶＳ　３２７点』

「「さ、３００点オーバー！？」」

あまりにも予想を上回る点数。Ｆクラスに入るくらいだから自分と同じくらいだと思っていた矢先に、とんでもない秘密兵器が現れたものだ。

雪冬は必死に召喚獣に指示を飛ばす。

「そのまま……押しきれぇえええええええええええええ？」

「な、なに！？」

雪冬の召喚獣は盾で相手を武器ごと圧迫しながら、徐々にダメージを与えていく。今まで見たこともないような戦法。かつて防具でここまで敵を圧倒した召喚獣が果たしていただろうか。明久は、あまりにも奇抜な戦い方に、只々呆然と突っ立っていることしかできなかった。

「すごい……」

「ちょ、ちょっとアキくん！　オレだけじゃ厳しい！　オレが抑えておくからそのうちにトドメを？」

「あ、オッケー！」

既に相手の点数は風前の灯。明久の低い点数でも余裕で倒せるところまで減少している。明久は木刀を掲げさせると、一気に相手の脳天へと振り下ろした。

点数がゼロになり、召喚獣は光の粒子となって虚空に消滅する。

「戦死者は補習――――――――――？」
「うわぁあああああああああああああああ？」

そして例の如く拉致される敵兵、柴田亮平。流石はモブキャラ。散り際までありきたりである。

「や、やったの……？」
「す、すごいや雪冬！　召喚獣使うの初めてなのに、もう戦果をあげちゃうなんて！」
「あはは、今のはアキくんの手柄だよ……おっと」
「ゆ、雪冬！？　大丈夫！」

へた、と突然脚から崩れ落ちた雪冬に、明久が慌てて駆け寄る。気分が悪そうな表情はしていないが……どうやら緊張の糸が切れて腰が抜けてしまったようだ。

「あ、あはは……力が抜けちゃった。オレ、こういうのって初めてだからさ……ごめんね？」
「いや、雪冬はよくやったよ。……はは っ」
「……ど、どうして笑うんだよぉ！」
「だ、だって……雪冬、なんか子供みたいなんだもん。身体も小さいし。とても高校生とは思えないや」
「もぅ……オレはれっきとした高校生だって。身体の大きさも土屋く……こーちゃんと変わらないし」

これまた子供のように頬を膨らませる雪冬。明久はそれを見てさらに笑い続ける。周囲を見ると、敵戦力はあらかた殲滅された後のようだ。仲間達が瑞希を中心に勝利の余韻に浸っている。

「それじゃ、僕たちも混ざりに行こうか」

「ん、そうだね」

明久の手を取り立ち上がる。二人はそのまま、集団の方へと足を進めた。

☆

「なに？　Ｆクラスに情報外の戦力が？」

「は、はい。どうやら転校生のようで、そのままＦクラスに……しかも、獲得点数は３００点オーバー。まだ日本史の点数しか明らかになっていませんが、おそらく余程の手練れかと思われます」

「そうか……よし、そのまま偵察を続けてくれ」

「はい」

高価な教材や機材が並ぶ、Ｂクラスの教室。そこの教壇に座っていた少年は、斥候からの情報を聞き、すぐさまノートを取り出した。

紫じみたサラサラの髪を、なにを考えているのかよりにもよってキノコヘアーにしている。一般的な考えを言わせてもらうと、百パーセントモテそうにない髪型だ。どう見ても悪役臭い。それとも、特殊なセンスを持っているのだろうか。

「ふん……Ｆクラスのクズ共のくせに、いきなり大した手札（カード）を切っ

てきたじゃないか」

作戦を記したノートに次々と赤ペンを走らせ、内容を書き換えていく。悪役のくせして、ずいぶんと頭の切れる男らしい。予想外の事態も慌てずにすぐさま新しい計画を立てていく。

「観察処分者は最初から眼中にない。ムッツリーニは保健体育だけ警戒しておけばＯＫ。島田は数学。坂本は……神童だが、今や落ちぶれたただのクズだ。心配はいらんだろう。……ということは、特に警戒すべきはこの二人か……」

【姫路瑞希】と【時雨雪冬】。

花丸で囲まれたその二つの名前に、少年は次々と対策を書き込んでいく。三分もたたないうちに、欄の真下は文字で埋め尽くされていた。

それを満足そうな表情で一瞥して、ノートを閉じる。彼はなぜか窓の方へと歩み寄ると、カーテンをわずかに開けながら、悪役特有の気持ちの悪い笑みを浮かべて、呟いた。

「Ｆクラスのクズ共め……雑魚には雑魚らしい立ち位置って奴を、上の立場の奴が直に教え込んでやるよ」

彼の名前は根本恭二。

Ｂクラスの代表であり、卑怯卑劣で悪名高い、最凶最悪のクズ野郎だ。

第三問（後書き）

雪「ゆっきーちゃんねるぅ～？」

雄「おー」

雪「みなさんこんにちは！　時雨雪冬です♪」

雄「アシスタントの坂本雄二だ」

雪「今回はついにオレの召喚獣がお披露目されたね。西洋の甲冑なんて……カッコイイー？」

雄「武器は盾のみだけどな」

雪「いちいち上げ足取らないでよゆー君！　……コホン。さて、今回はオレの召喚獣についての情報を紹介するよー。ゆー君お願い！」

雄「はいはい。雪冬の召喚獣は、一般的な西洋鎧だ。類似体に姫路や木下姉の召喚獣がいるな。基本的な形はあれと変わらない。ただ、スカートの部分がズボンだったり、フリルが付いている部分はなくなっているなど、細かい点では男用にはなっているがな。

そして武器は【大盾】。文字通りドでかいシールドだ。想像できない人は、そうだなぁ……巨大な周囲が少し滑らかな長方形の鉄板を思い浮かべてくれればそれでいい。

基本的な戦法は【キングダム〇ーツ】の【グ〇フィー】と変わらない。防御して防御して……隙があれば殴る！　といった感じだ。……こんな感じか？」

雪「はいゆー君説明ありがとう！　さて、次回からはこのコーナーにもゲストがやってくる予定です。ベース的には本作品のキャラから出す予定ですが、リクエスト次第では他作品のキャラをお借りすることもあるかもしれません。興味がある方は是非ご一報ください！」

雄「【オレとゆー君と召喚獣】関連の質問や感想も、どしどし受け付けているぞ」

雪「はい、それではまた次回、後書きにてお会いしましょう」

雪・雄「バイニー？」

第四問（前書き）

こんにちは。ふゆいです。
今回も無事に更新。後は週末かなぁ。
それでは、お楽しみください。

第四問

廊下での戦いも落ち着きを見せたため、雄二の指示を仰ぎに、明久と雪冬、秀吉は一度Ｆクラスの教室へと帰還していた。
しかし、戻ってきた彼らの目に入ったのは、穴だらけにされた卓袱台と、へし折られたいくつものシャープペンシル。Ｂクラスの手によって、無残にも破壊しつくされた教室の惨状だった。

「うわ、これはひどい……」
「まさかこうくるとはのう」
「なんかもうテンプレすぎて逆に根本君が小さく見えちゃうよ……」

目の前の教室に各々呟きを漏らす三人。それほどまでに、破壊された文房具が酷いありさまだったのだ。流石は悪役根本恭二。やることも一々小物臭い。まさにクズだ。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」
「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」
「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、錯塩に大きな支障はない」
「あ、ゆー君」

途方に暮れる三人に、教室の修復に勤しんでいた雄二が声をかける。しかし、クラス代表である雄二は戦争中ずっと教室にいたはず

だ。開始前まではなにも起こっていなかったから、これは戦争開始から今までに起こった嫌がらせだろう。だが、それならばどうして雄二は未然に防げなかったのだろうか。

「協定を結びたいっていう申し出があってな。調印の為に教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「あぁ。三時までに決着がつかなかったら戦況はそのままにして続きは明日午前九時に持越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止にする。ってな」

「それ、承諾したの？」

内容を口にする雄二に、明久が不思議そうに尋ねる。おそらく、彼は体力に訴えた方が有利になるのではないかと考えているのだろう。

「そうだ。確かにこちらとしては体力勝負に訴えた方が有利になるが、主戦力にとってはなかなか厳しい」

「姫路と雪冬、じゃの」

「あ、そっか」

「あいつらを教室に押し込んだら今日の戦闘は中止になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないし」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも二人の戦闘力の方が重要になる」

おそらく局所的戦闘になる。雄二は明日の戦況をそう予想していた。

話もまとまったところで、明久達は教室の片づけを再会する。今のうちに道具を揃えておかないと、これからの戦争に影響が出るか

らだ。
黙々と作業を続ける。
その時、少し慌てたように教室に康太が戻ってきた。

「どうした、ムッツリーニ。そんなに真剣な顔で」
「……Cクラスの様子が怪しい」
「Cクラスが？」
「……（コクリ）」

そして、情報を伝えていく。
康太の話によると、どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めているとのこと。まさか、Aクラスを相手に戦おうと思っているわけでもあるまい。だとすると――――

「漁夫の利を狙うつもりか？　いやらしい連中だな」

雄二の言うとおり、この戦争の勝者を相手に戦争を仕掛けるつもりだろう。疲弊した相手なら潰しやすいために。Cクラスもなかなかのセコいクラスである。

「雄二、どうするの？」
「そうだな。とりあえず、Cクラス相手に協定でも結んでくるか。お互いに不可侵状態になれば、心配事も減るだろう」

そう言うと雄二達は一旦作業をやめ、Cクラスへと向かう準備を始める。時刻は三時十分。まだ遅い時刻というワケではない。
いよいよ出発となった時、今までずっと黙り込んでいた雪冬が、突然「ゆー君！」と大声を出した。
珍しい彼の叫び声に、クラスメイト達が思わず足を止める。

「どうした？　なにか問題でも」
「Ｃクラスの情報は、罠かもしれない」
「なに？　どういうことだ」
「こんなタイミングでＣクラスが動き始めるっていうのは、どう考えても不自然だよ。Ｂクラスと協定を結んだ瞬間と同時に用意を始めるなんて。多分だけど、Ｂクラスとグルなんじゃないかな？」
「……なるほど。そのまま不可侵条約を結びに行けば、Ｂクラスが待ち受けている可能性が高い、と」
「うん。それで、【試召戦争に関するすべての行為を禁ずる】っていう協定内容を破ったからという理由で、攻撃を喰らうかもしれない。下手をすれば、そのまま全滅なんてこともありえる」
「ふむ……言われてみるとそうだな」

雪冬の言葉に、雄二は熟考するようにトントンと自らの額を指で叩く。明久達は、思いもよらぬ雪冬の頭の良さに、ただただポカンと口を開けていた。彼の評価は【ただの大人しい転校生】から、【意外と頭のいい優等生】へと変化していることだろう。

「しかし、このままだと戦争終了後にＣクラスに攻め込まれてしまう可能性が残る。それは、どうするつもりだ？」
「大丈夫。それの対策も、今思いついたからっ♪」

雪冬はチラッと一人の人物に視線を向けながら、楽しそうに笑う。彼の視線の先には、ボブカットの男の娘が必死に雄二達の会議内容を理解しようとしている姿があった。
自分に向けられている視線にようやく気付いた彼は、頭に疑問符を浮かべ、自分の方を指差す。

「ん？　ワシが、どうかしたかの？」

演劇部のホープ、木下秀吉。
ついに、彼の実力を発揮するときが到来した様だ。
雪冬はこれから実行する作戦を、子供が自慢話をするように、輝いた表情でクラスメイト達に説明していった。

☆

「恭二、本当にFクラスは私達の所に来るの？」
「あぁ、なにせあのバカ共だからな。俺の作戦に気が付く訳もない。罠に嵌められたとも知らずにのこのこやってくるさ。そうすれば、後は俺達でとどめをさしてハイ終わり。くくっ、これだからバカってのはおもしろい」

Cクラスの教室では、Bクラス代表根本恭二が数人のBクラス生徒を引き連れて、雄二達が来るのを今か今かと待ち続けていた。
神童とまで言われた雄二が自分の罠に嵌る。と、非常に清々しいほど腐った笑みを浮かべる恭二。しかし既にその作戦は見破られていて、しかも対策まで立てられているとは夢にも思わないだろう。

「でも、Fクラス代表の坂本クンって、相当頭が切れるらしいじゃない。アンタ大丈夫なわけ？」
「おいおい、俺を誰だと思ってんだよ。卑怯なことをさせれば右に

出る者はいないとまで言われる根本恭二サマだぜ？　神童だか何だか知らねぇが、既に落ちこぼれたヤツなんかに負けるわけねぇっつうの」

「ふぅん……ま、足元を掬われないように気をつけなさいよ？　アンタはすぐ油断するんだから」

「分かってるって」

もう勝利は確定しているというような態度をとる恭二に、Ｃクラス代表小山友香が呆れたように嘆息する。彼がこういう態度をとるときは、決まってなにかしょうもないミスをする。それも普段の彼なら絶対に冒さないような初歩的なやつを、だ。彼女は表情には出さないながらも、心の底では一度くらい痛い目を見た方がいいだろうと考えていた。恋人同士にも関わらずそんな不謹慎なことを思うとは……この二人。分かれる日も近いかもしれない。

そんな風に、二人がＦクラスが来るのを待っていた時だった。

突然、Ｃクラスの扉がガラッと勢いよく開かれたのだ。

同時に入室してくる一人の女子生徒。

肩まで伸ばした茶色のボブカットに、前髪は銀色のピンで左へ流している。整った顔立ちはクールさを醸し出し、まさに優等生と言った具合だろうか。

突如現れた彼女――――木下優子に驚きを隠せないＣクラス＆Ｂクラス生徒達。目を丸くしたままの状態の彼らに、女子生徒はあろうことかいきなりこんなことを言い放った。

「静かにしなさい！　この薄汚い豚ども？」

『『『！？』』』

突然の罵声。まさかＡクラスの優等生がそんな汚い言葉を使うとは。密かに彼女に好意を抱いた生徒もいただろうに……。

「な、なによアンタ！」

急に現れて自分たちを豚呼ばわりした優子に、友香は若干戸惑いながらも怒鳴りかかる。しかし優子は一切動揺を見せずに、偉そうに前髪を手で払うと言葉を続けた。

「話しかけないで！　豚臭いわ！」

自分から話しかけたにも関わらず罵声を言い続ける優子。もう矛盾とか理不尽とかを一気に通り越して溜息しか出てこない。なんて女だろうか木下優子。どうすれば初対面の人間にここまで人道から外れた態度をとれるのか、甚だ疑問である。

「アンタ、Ａクラスの木下ね？　ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！　なんの用よ！」

「うるさいわね。静かにしなさいと言ったのが聞こえなかったのかしら？」

キーキーとヒステリーボイスで叫ぶ友香を優子は軽くいなす。

教室の隅に隠れて彼女達の掛け合いを見ていた恭二は、どこか違和感に気が付いていた。

（おかしい……なんでこんなタイミングでＡクラスが動くんだ？しかもよりによってＣクラス。もっと下のバカ共は旧校舎にまだ三クラスもいるってのに……）

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！　貴女達なんて豚小屋で充分だわ！」

「なっ！　言うにことかいて私達にはＦクラスがお似合いですって！？」

別にFクラスとは一言も言ってはいないのだが、彼女の中では豚小屋＝Fクラスの教室という方程式が成り立っているらしい。憐れFクラス生徒達。君達は今この瞬間、今まで豚と同等の扱いをされていたことが判明した。

「手が穢れてしまうから本当は嫌なのだけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから？」

優子はそう言い残すと、靴音を立てながら教室を後にする。

後に残されたCクラス生徒達は、ふつふつと沸いてくる怒りの感情を確かに感じていた。

「あ、あの猫かぶり女めぇ……！　みんな！　私の言いたいことは分かるわね！？」

『もちろん！』

『あの舐めきったAクラスに目に物見せてやりましょう！』

『俺達だってやればできるんだ！』

「お、おい！　冷静になれお前達！　これは絶対なにかの罠だって――――」

「うるさいわよ恭二！　アンタは部外者なんだから黙ってて？」

なにかに勘付いた恭二が必死に止めようとするが、既にボルテージが最高潮の彼らは一向に止まる様子を見せない。

（くそっ……坂本のヤツ、やりやがったな……！）

目の前で徐々にテンションを上げていくCクラス生徒達を見ながら、恭二は悔しそうに拳を握りしめていた。

「あっはっは。いやー、流石は秀吉。凄い手際だったな」
「うん。さすが演劇部の期待の星だね。まさかあそこまで完璧に演じるなんて。……まぁ、僕のなかで木下さんの評価がちょっと変わったけどね……」
「……大手柄」
「い、いや、そこまで手放しに誉められると照れるのぅ……そもそもこれは全部雪冬のおかげじゃろうて」
「うぅん。オレはひで君の長所を生かしただけだよ。Cクラスをやる気にさせたのは間違いなくひで君の手腕だって。誇っていいよ」
「そうかのう……？　まぁ、そこまで言うならありがたく受け取っておくぞ」
「さぁて、これでとうとう邪魔者はいなくなったな」
「明日からは気が楽になるね」
「うん。これで、Bクラスを心置きなく倒せるよ」
「あぁ。根本のクズヤロー。俺達を怒らせたらどうなるか、その身体に教え込んでやるよ」

☆

第四問（後書き）

雪冬「ゆっきーちゃんねるぅー？」

雄二「おー」

雪「おはゆっきー！　司会の時雨雪冬です♪」

雄「アシスタントの坂本雄二だ」

雪「早いものでこのゆっきーちゃんねるももう三回目！」

雄「そもそも作者の思い付きで始まったようなもんだからな」

雪「これもひとえに読者の皆様のおかげ。というわけで今回はゲストをお呼びしました」

雄「みなさんご存知最強のバカ。吉井明久だ」

明久「ちょ、ちょっと雄二！　バカ扱いは酷くない！？」

雄「何を言う明久。ゴミ扱いされないだけマシと思え」

明「これ以下の扱いがあるのか！」

雪「さてゲストのアキくんですが、アキくんはこの作品をどう思いますか？」

明「うーん、なんというか、原作と違うところはあまりないけど、雪冬がなんか雄二とＢＬになりそうな感じがするね」

雄「そうか。お前はそんなにハバネロが好きなんだな。それなら両目にこれでもかというくらい塗りたくってやろう」

明「ギャ――――ァッ？　目がっ！　目がぁっ？」

雪「もう駄目じゃないかゆー君。……こういうときは鼻にわさびも詰めないと」

明「鼻から激しい辛みが！　涙が止まらない！」

雄「……っと、明久を虐めている間に時間が来てしまったようだな。まったく。どこにいようが迷惑なやつめ」

明「え？　僕のせいなの？」

雪「それでは次回、後書きでお会いしましょう。次回もゲストは来る予定です」

雄「感想・質問・ゲストの使用許可、待ってるからな」

明「ねぇ待って。ホントに涙が止まらないんだけど」

雪「それではまた皆さんに会えることを願って」

二人『さよーならー？』

明「僕はァ――――――――――――！？」

第五問（前書き）

こんにちは。お待たせしてしまいすみません。
今回でＢクラス戦は終了です。次回からはＡクラス戦かな？　いや、その前に戦後対談か。
そして、今回は諸事情により【ゆっきーちゃんねる】はお休みです。楽しみにしている方々がいたら、申し訳ありません。次回、必ず放送します。

それでは、お楽しみください。

第五問

Ｆクラス対Ｂクラス　二日目

昨日雄二が結んだ協定により、Ｂクラス前の渡り廊下から再開となった試召戦争。

前線部隊は、姫路瑞希を隊長。時雨雪冬を副隊長として、Ｂクラスの防衛線へと攻め込んでいる。

「敵を教室の中に押しとどめるんだ！　前後のドアを利用して多対一で相手するようにね！　単独行動は絶対に避けてよ？」

「点数が危ない人はすぐに退いてください！　そのときに報告するのもお願いします！　抜けた穴に私達が入りますから？」

Ｆクラス二大参謀ともいえる二人が的確に指示を出し続ける。そのおかげか、圧倒的に格上のＢクラス相手に、Ｆクラスは互角以上の戦いを繰り広げていた。まさに下剋上。学年最低クラスでありながら上位クラスと渡り合うその姿は、戦争の手段が学力だけではないことを十二分に証明してくれている。現に相手のＢクラス生徒達の間には動揺と焦り、そして困惑が広がり始めていた。

自分達の足元にも及ばない成績のバカ共なんて、本気を出すまでもない。瞬殺に決まっている。

そんな風に考えていたにも関わらず、現在の劣勢的な戦況。彼ら

の士気が削られていくのも頷ける。強者ゆえの弱点と言ったところだろうか。失うものがありすぎる彼らが、もう前に進むしかないFクラスに恐れをなすのは、当然だと言えよう。

『えぇい！　お前らFクラス相手になにを苦戦しているんだ！　仮にもBクラスなら手間取るんじゃねぇよ！』

『うるせぇ！　だったらお前が自分で攻めればいいだろ？』

『私達にばっかり命令して……この意気地なし！』

『な、なんだと！？　お前ら、俺は代表だぞ？』

対するBクラスは予想外の戦況と、思うようにいかないストレスで内部崩壊も間近の様子。代表格である根本恭二のやつあたりまがいの命令さえも、生徒達は聞く気が一切ないようだ。

「よし……このまま何事もなければ――――」

――――勝てる。

廊下で戦っているFクラス生徒全員が、一様にそう確信していた。隊長格の瑞希と雪冬も、自らの召喚獣を巧みに操りつつ、喜びに満ちた表情で顔を見合わせる。後少しで、勝利が――――――――

『ちっ！　しかたねぇ。これだけは使わないつもりだったが……姫路！　これを見やがれ？』

そのとき、突然根本が叫びだし、戦場の注目を自分へと集めた。全員がそちらを見ていることを確認すると、彼は実に楽しそうにと

あるものを取り出す。
　それは、一通の便箋。薄ピンク色をしたそれの中心には、可愛らしいハート型のシールがちょこんと貼りつけてある。俗に言う、ラブレターというやつだろうか。随分と純粋な雰囲気がある。
　なにやってんだ、アイツ。と、全員が呆れかえる中、ただ一人。そう、Ｆクラス前線部隊隊長、姫路瑞希だけは、顔面も蒼白と言った様子で、すっかり色を失った両手で自分の口元を抑え、必死に叫ぶのを抑えていた。
　そんな彼女の挙動に、根本はニヤリと薄気味悪く笑う。

「……わかるよな？　姫路。お前が今から、どうすればいいのかよぉ」
「ぁ……ぁぁ……」
「あぁん？　聞こえねぇなぁ。いいのか？　この手紙を公開しちまってもよぉ」
「ゃ……だ、だめ……」
「アヒャヒャヒャ？　いいねぇいいねぇ最高だよ姫路よぉ？　俺はそういう絶望しきった表情が大好きなんだ？」

　外道、ここに極まれり。根本はあろうことか、昨日Ｆクラス教室を襲った際に、姫路の鞄からラブレターを抜き取っていたのだ。そして、それを戦争の道具に……。
　あまりにも悪質な根本の戦術に、Ｆクラス生徒が次々と罵詈雑言を並べ立てる。

『ふざけんじゃねぇぞ根本！』
『姫路さんになんてことしてやがる！』
『このクズが！　男の風上にもおけねぇ？』
「うんうん分かるよ分かってるって。あぁそうさ！　俺は最低のクズヤローさ？　だが、それがどうした？　クズで何が悪い？　戦術

がいくら腐っていようが、これは戦争だ。お前らにとやかく言われる筋合いはこれっぽっちも持ち合わせてないんだよ！　この脳無し野郎どもが？」

怒り心頭の彼らの言葉もどこ吹く風。根本は自分の策に嵌った瑞希たちを嘲笑うかのようにふんぞり返っていた。

「なんてヤツだ……根本君……！」

根本のあまりにも卑劣なやり方に、転校生でありロクに彼を知らない雪冬も隠すことなく怒りを露わにする。

――――許せない……！　あんな卑怯な真似、絶対に……？

「……ねぇ、雪冬」

と、そんな中、一人の少年が雪冬へと話しかけてきた。

彼には人に自慢できるものなんてない。戦力に直接影響する学力いたっては、学年最低ランクに過ぎない。

「……なに？」

「僕さ、勉強もできない最低のバカだけどさ、人並みには心を持っているつもりなんだよ」

「……うん」

風紀だってよくはない。何かある度に鉄人のお世話になったりもしている。学園を代表しての不良生徒と言われても反論はできない。実際に、学園の評判を落としているかもしれない。

「だからさ、僕にも許せないこととか、どうしても殴らないと気が

済まないこととかがたくさんあるんだ。たとえば……あのクズ野郎のやったこととかさ……」

「……奇遇だね、オレもまったく同じ気持ちだよ」

しかし、だからこそ彼は立ち上がる。

自分の大切な人。好意を抱いている人を守るため。そして、彼女を傷つけた愚か者を成敗するため。

「……それじゃ、行こうか。雪冬」

「オッケー。任せなよ、アキくん」

観察処分者吉井明久は、未知数の少年時雨雪冬を伴い、今、正義の鉄槌を装備して、最低卑劣のＢクラス代表、根本恭二の制裁へと向かう。

――――あの野郎、ブチ殺す？

☆

島田美波はただただ驚きを隠せなかった。

先ほどまで明久と一緒にＢクラスに応戦していた。しかし、その途中に根本が秘策を実行。瑞希を事実上の戦闘不能へと追い込んだ。

当然、美波も怒りではらわたが煮えくり返りそうだった。今にでも戦闘を中断して、あのクズをボコボコにしてやりたいほどに。

しかし、フィールドが数学である以上、彼女が戦場を離れるわけにはいかない。美波はあくまでも、数学フィールドの主力なのだ。自分の独断で動けるほど、気楽な役割ではない。

自分にはどうすることもできない。そう思い、諦めかけたときだった。

「……美波。僕、ちょっと行ってくるよ」

「え？　アキ……？」

「ここはもう敵も少ないからさ。美波と……秀吉を主軸にして、残存勢力を駆逐していって。それで充分だろうから」

「それは分かったけど……アンタ、一体何を……」

「ちょこっと、やることができたんだよ」

そういうと、明久は前線で戦闘を繰り広げている雪冬の下へと向かった。しばらく何事かを話した後、二人は何かを決意したような表情で、Ｂクラスの教室を見やる。それはまるで、死地に赴く戦士たちのようだ。

（アキ、時雨……何をするつもりなの……？）

単純に、疑問。

たった二人、しかもＦクラスの彼らが何をしようというのか。

美波は静かに、彼らの様子を伺う。

……そして、数分がたったときだった。

「「うおぉぉおおおおおおおおおおおおおお？」」

突然、二人は雄叫びを上げながらＢクラス戦力へと特攻を開始したのだ。

もちろん、その場にいた全員が目を丸くする。

『『『は……はぁあああああああああっ！？』』』

何を考えているのか。無謀もいいところだろうに。

彼らはそう思った。一般的に思案しても、その答えが出るのにそう時間はかからないだろう。

……そう、彼らが【普通】の生徒ならば。

『ちっ！　トチ狂ったか？』

『返り討ちにしてやるわよ？』

当然の如く、守備隊の一部が迎撃に当たる。表示される点数はそれぞれ【２３０点】と【１８４点】。十分に高得点と言えるだろう。対する二人は【７８点】と【９５点】。学年最低成績と純粋な文系にとって、数学フィールドはあまりにもハードルが高すぎる。誰もが、彼らの戦死を確信した。……しかし、

「「邪魔だぁ――――――――――――――っ？」」

『なっ！？』

『えぇっ！？』

雪冬の盾が敵の顔面を圧死。明久の木刀が喉を貫き瞬殺。どれもためらいなく放たれた一撃だった。

一体、どれほどの操作能力があればあんな芸当ができるのか……。

（ていうか……時雨は転校生よね……？）

操作練習なぞ、ロクにしたことがないだろうに……。美波をはじめとした生徒全員が、雪冬のポテンシャルの高さに感嘆を見せる。それほどまでに、雪冬の存在はイレギュラーだったのだ。

「あいつら……ほんと何者なのよ……」

美波の呟きは、誰にも拾われることなく、戦場の喧騒に呑み込まれていった。

☆

『これ以上行かせるかよ！』

『バカのくせにいきがるんじゃねぇ？』

「くそっ、数が多すぎる……」

「ここまでなの……？」

やっとの思いでBクラス教室内へと進入を果たした雪冬と明久の二人。しかし、彼らを待ち受けていたのは十人ほどの近衛部隊だった。

圧倒的戦力差の前に、勢いと根性だけで突っ込んできた彼らも絶望しかけてしまう。最早、ここまでなのか……！

『諦めんじゃねぇぞ、時雨！　吉井！』
「ぐはぁっ！」
「「えっ？」」

突如として教室中に響き渡った叫び声。同時に、近衛部隊の数人が一瞬で戦死する。
いきなり討伐された手下に、根本が驚きを露わにする。雪冬と明久は、慌てて声のした方を振り向いた。
そこには……

「お前らは俺達の気持ちを代弁してくれた。それなら、思いっきりあのクズをぶちのめしてこいよ」
「須川君……」
「ワシもそう思うぞい。男なら、女の為に身体を張ってでも維持を貫き通すべきじゃ」
「ひで君……」
「ウチも。アンタ達みたいな純粋な根性って、割と好きなのよね」
「美波……」
『頑張れよ、吉井！』
『負けんじゃねぇぞ？』
『絶対勝てよな！』
「み、みんな……！」

須川亮、木下秀吉、島田美波を筆頭に、ほぼすべての前線部隊が列をなし、彼らの道を切り開いていた。そして、なぜだろうか。彼らの顔には絶望はおろか焦りの一つさえも見当たらない。それほど、二人を信用してでもいるのだろうか。

「こ、このバカ共が！　こいつら二人で俺に勝てるとでも思ってや

がるのか！？　ば、バカも休み休み言いやがれ？　戦力差が分からねえのか！」
『うるせぇ？　クズは黙ってろ！』
「ひぃっ！？」

想定外の戦況に動揺を見せながらも舌戦に持ち込もうとする根本。しかし、すでにブチ切れている彼らにそんな小手先の作戦が通用するはずもない。軽くいなされ、逆に威嚇を喰らってしまった。

「……ありがとう、みんな」
「……じゃ、行くよ、アキくん」
「く、来るな！　来るんじゃねえ！　こ、この手紙が見えないのか！？　それ以上近づいたら、これをズタボロに破いて――――――」
「「それ以上口を開くな、この下衆野郎がぁ――――――――――っ？」」
「ひぃぃいいっ？」

いくら根本がBクラス、しかも代表クラスであろうとも、戦意を失った状態で勝利できるほど彼らは弱くはない。
怯えて尻尾を巻いて逃げだそうとする根本を追撃。そのまま、ありったけの攻撃を、召喚獣と本人の両方に、これでもかと叩きこんでやる。そのまま、点数がゼロになったのか、召喚獣は光の粒子となって空中に霧散。後には、ボロボロになった状態で床に捨てられている根本恭二の姿があるだけだ。

そして、今ここに、Fクラス対Bクラスの試召戦争が、Fクラスの下剋上達成という形で終焉を迎えたのだった。

第五問（後書き）

感想、お待ちしています。

第六問（前書き）

こんにちは。連続投稿のふゆいです。
疲れた……今日は疲れた……。
それでは、お楽しみください。

第六問

「さぁて、とりあえずは嬉しい楽しい戦後対談といこうか？　根本さんよぉ」
「……」

Ｆクラスの勝利で幕を下ろした試召戦争。今、彼らはＢクラスの教室に集まり、戦後対談を始めていた。実に楽しそうな表情でふんぞり返っている雄二と、反対に今にも消えてしまうのではないかと思うくらい沈んだ表情の根本。あそこまで余裕ぶった作戦を披露しておいて完敗したのだ。彼の落ち込みようもまぁ納得がいく。

「こんなタイミングで言うのもアレなんだけどな。俺は去年からお前のことを目障りだと思ってたんだよ。何かと友人も被害に遭ってるし、何度か俺にも仕掛けてきたしな」
「……」

雄二の言葉にも、何の反応も示さない根本。彼の去年の悪評を知っているためか、Ｂクラス生徒達でさえもフォローを入れることもしなかった。それほど、彼はこの学園でやっかまれているのだ。

「まぁ本来なら、設備を明け渡してもらってボロいカビ付卓袱台と畳のセットをプレゼントしてやりたいところなんだが……特別に免除してやらんでもない」

「……なん、だと……？」

そんな雄二の発言に、クラス中がざわざわとざわつき始める。Ｂクラスの方からは、疑問の声が大量に上がっていた。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ、確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

「……条件はなんだ」

雄二の台詞に、根本が力なく応じる。敗軍の将となってしまった以上、いくら彼とて反抗する気は一切無いようだ。まぁここで犯行の意志を見せようものなら、否応なしにクラスメイトからの総リンチに遭うことは目に見えている。賢い選択と言えるだろう。

「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺……だと……？」

「あぁ。とりあえず、Ａクラスに『試召戦争の準備ができている。いつでも攻め込める体勢だ、覚悟しておけ』と宣言してこい。俺達の作戦に必要不可欠なことだからな。頑張ってくれよ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような視線を向ける根本。それもそのはず。彼は普通なら半殺しにされてもおかしくないような行動をしたのだ。さすがにこれぐらいで許してくれるとは到底思えないのだろう。

その反応に、雄二はニィッと口の端を持ち上げた。

「本当はそれだけでよかったんだけどな……ま、後は雪冬に任せる

さ」
「了解。やぁ、根本クン。ご機嫌はいかがかな？」
「く……」

さきほどまで明久と二人で自分をボコボコにしていた少年、時雨雪冬が妖しい笑みを浮かべてさっそうと現れる。その姿は、まさに悪の秘密結社参謀のようだ。今からあなたを貶めますと言わんばかりのオーラが滲み出ている。そんな雪冬に、根本はただただ恐怖を感じるしかなかった。

「と・り・あ・え・ず♪　……君にはこれに着替えてもらうよ。そして、その格好でＡクラスに行くんだ」

そう言って雪冬が取り出したのは、学園の女生徒用制服。決して、男性用ではない。女子生徒専用の制服だ。
当然、根本は全力で拒否する。

「い、いやだ？　誰がそんなものを着るものか――――」
『Ｂクラスみんなで必ず実行させよう！』
『任せて！　絶対にやらせるから！』
『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな？』

Ｂクラスから湧き起こる暖かい声援。今まで根本がそんな態度をとってきたのかがありありと分かる光景だ。

「さぁ、お着替えの時間ですよぉ……」
「ひぃっ！　よ、よるな変態ぐふぅっ」
「とりあえず黙らせました」
「う、うん……」

Bクラス生徒の速すぎる変わり身に、雪冬はただただ冷や汗を流す。

人間、ここまで非情になれるのか、用心しよう。そう彼が思ったのも、いたしかたないことだろう。

「それじゃ、着付けに移るかなっ。アキくん、はい根本君の制服」

「ぬ、脱がすの早いね雪冬……。ま、ありがとう」

「いえいえ。早く届けてあげなよ？　ヒーローさんっ」

「……ほんと、面白いよね、雪冬は」

ありがとう。そう言い残し教室を立ち去る明久。彼が最後に聞いた言葉は、Bクラス代表が目覚めそうになったため、雪冬と雄二によって昏倒させられた際の呻き声だった。

☆

「さて……姫路さんの鞄は……っと」

Fクラスに戻った明久は、誰もいないことを確認してから瑞希の鞄に手紙を入れる。いくら落し物を返しているだけとはいっても、事情が知らない人が見れば明久がラブレターを入れているようにしか見えない。彼としても、それだけはなんとしてでも避けたかった。

……後で変な噂がたっても嫌だし。

「さて、任務完了――――」

「よ、吉井君っ」

「ふえっ!?」

突如背後からかけられた言葉に、思わず奇妙な声を上げてしまう明久。耳元まで真っ赤になっているのは、おそらく羞恥からくるものだろう。男子なのに、女子みたいな声を出してしまった。雄二なら飛び降りるかもしれない。

慌てて振り向く。そこには、胸に手を当て自分の方を見つめている姫路瑞希の姿があった。

「ど、どうかした?」

あくまでも平静を保ちつつ応答する。こういうときは冷静な方がいいとでも考えているのだろうが、冷や汗ダラダラのうえに顔色は真っ青のため、空回り具合がハンパない。相変わらずの不器用さである。

そんな色んな意味でいっぱいいっぱいの明久に、瑞希はあろうことか正面からいきなり抱きついてきた。

想定外――――というか、彼の想定内なぞたかが知れているのだが――――の事態に明久は顔を沸騰させ、奇声を上げる。

「ほわぁぁぁっっと!?」

「あ……ありがとうございます……私、本当にどうしたらいいかわからなくて……」

「ちょっ、姫路さん!　とりあえず泣き止もうよ、ねっ?　泣かれると僕も困るしさ……」

そう言って瑞希の身体を離すヘタレ明久。男なら泣いて喜ぶであろう展開を自らふいにするなんて……確実に後悔するに違いない。

（って、なに引き離してんだよ！　バカ！　僕のバカ！　こんなチャンスは二度とないだろうが？　あぁっ、もう一度抱き締めてって言いたい？）

後悔してました（笑）

「吉井君……手紙、ありがとうございました」

「あ、いや……あれは雪冬のおかげだよ。僕一人じゃ、何もできなかったし」

「そ、そんなことありませんっ。吉井君は、私のために頑張ってくれました。……それに、坂本君から聞きましたよ？　この戦争、私のためにやってくれているんですよね？」

「そのような事実は一切確認されておりません」

「ふふっ、相変わらず嘘をつくのが下手ですね、吉井君って」

「うっ……そう言われると反論できないものが……」

瑞希の指摘に明久が恥ずかしそうに頬をかきながら目を泳がせる。どうやってこの話題を終わらせようか。このままだと恥ずかしすぎる……。そんな彼の考えはそれはもう勢いよく顔に出ていた。

「吉井君は昔からそうですよね。優しくて、格好良くて……今でも、私の憧れなんですよ？」

「憧れって……僕に憧れても意味はないと思うけどなぁ」

「そんなことないです。吉井君には吉井君にしかない優しさがあるんですから。私、すごく嬉しかったです。時雨君にもですけど、やっぱり、一番は吉井君に。……本当に、ありがとうございました」

「あ、うん、その……ど、どういたしまして……」

自分から進んでやったことなのに、いざお礼を言われてしまうとしどろもどろになってしまうのはいつの時代でも変わらないようだ。
結局そのまま数分間、戦後対談を終えた雄二達が教室に戻ってくるまで、明久は調子に乗り始めた瑞希によってからかわれ続けたのだった。

☆

「……ふぅ」

Aクラス教室のとある席。そこでは、Aクラス代表である霧島翔子が幼馴染の迎えを今か今かと待っていた。
この学園に雪冬が転校してきてから、翔子は絶対に彼と帰るようにしている。それは、親友が久しぶりに帰ってきたからというのもあるが、下校中に彼から聞かされる、自分の知らない坂本雄二を知ることが主な要因だ。自分の好きな人のことは知っておくに越したことはない。
そういうわけで、彼女は勉学に勤しみながら、雪冬が来るのを待ち続けていた。

「……代表？　まだ残ってたの？」

と、そんな彼女に声をかけてきた、一人の女子生徒。
肩まで伸ばしたボブカットで、前髪はヘアピンで左の方へと分けられている。顔立ちもよく、美少女と言える範囲内だろう。少し吊り上った目が、彼女の勝ち気さを醸し出している。
そんな少女――――木下優子に、翔子はわずかに表情を崩した。

「……優子も、残ってたんだ」
「残ってたっていうか……アタシは、Fクラス対Bクラスの中継を見ていただけよ。ちょっとおもしろそうだったし」
「……そう」

少し心惹かれる話題ではあるが、結果は聞かない。彼女の反応からして、どうやらFクラスの勝利で終わったようだ。

（……まぁ、雄二がそんな簡単に負けるはずないけど）

神童とまで呼ばれていた彼は、勉学で落ちこぼれようともその頭の良さまでは落ちこぼれてはいない。彼の作る戦術に敵う者など、この学園には翔子くらいしかいないだろう。幼馴染ゆえの、勘ともいうが。

「……それで、なにか得られるものはあったの？」
「うーん、吉井君の観察処分者としての有用性くらいかな。あんな低い点数なのに、三倍以上の相手と渡り合うんだもの。そこは素直に凄いと思ったわ」
「……そうなんだ」

彼女が人を褒めるとは珍しい。落ちこぼれ相手なら無条件で暴言を吐く優子にそこまで感じさせるとは……吉井という少年、思って

いたよりも手練れかもしれない。

（……でも、それでも雄二には敵わない）

相変わらず、雄二一直線な少女であった。

「……あ、でも……一人だけ、気になる男子がいたのよね」

「……男子？　Ｆクラスの？」

「うん。ほら、この間転校してきた子よ。代表と坂本君の幼馴染っていう……時雨君だっけ？」

「……時雨、雪冬」

「そうそう、その時雨君。彼、なかなかいい目をしていたのよ。大人しそうなのに、どこか確固たる意志を持った目っていうのかな？　なんていうか、アタシ好みの子だったわ」

ドリンクバーでコーラを注ぎながら、楽しそうに語る優子。なぜだか彼女の口元が、妖しく歪んでいるようにも見えた。

「……雪冬は、優しい人。私の、かけがえのない親友なの」

「へぇ……代表の親友かぁ……。……一層、興味がわいてきたわ」

どうやってコンタクトを取ろうかしら。そう呟きながら薄気味悪く笑う優子に、翔子は嘆息しながら親友の無事を祈るしかなかった。

（……あ、でも、もうすぐここに来ちゃうんだっけ）

雪冬の身に、最大のピンチが舞い降りようとしていた。

第六問（後書き）

雪冬「ゆっきーちゃんねるぅ～？」

雄二「いぇーい」

雪「さて今日も始まりましたゆっきーちゃんねる。前回は諸事情によりお休みだったけど、なんとか同日中に放送できたね！」

雄「俺としては休みたかったけどな」

雪「さて、とうとう四回目を迎えたこのラジオですが、今回も素敵なゲストをお呼びしております！」

雄「我がFクラスが誇る驚異のスケベ、ムッツリーニこと土屋康太だ」

康太「……スケベではない」

雪「うん、相変わらずムッツリを貫き通すんだね、こーちゃんは」

雄「まぁ誰も信じてないけどな。盗撮野郎が何を今更」

ム「……そのような事実は確認されていない」

雄「ほんっと揺らがないよな、お前」

雪「とりあえず本題に入ろうか。こーちゃんは原作と違って、出

番がなかったよね？　実際、どう思った？」

ム「……断固抗議を申し込む」

雄「ムッツリのくせに出しゃばるなよ」

ム「……馬鹿にするな。俺は当然の権利を主張したまで。この小説においての俺の扱いには憤りを感じざるを得ない」

雪「まぁそれは作者さんが検討することだから、オレ達からは何も言えないよ」

雄「……おっと、そうこうしている内に時間が来ちまったみたいだな」

雪「相変わらず早いねー。ま、仕方ないか」

ム「……感想、ゲスト依頼、コラボ承諾、どしどし待っている」

雄「そんじゃまた次回、後書きで会おうな」

雪「さよ～なら～♪」

第七問（前書き）

更新遅れてごめんなさい！　ちょっとばかし私生活の方が忙しかったです？

と、とりあえず更新できたことは喜ぶとしましょう。やめなくてよかった……。

さ、さて、今回の注意事項を述べておきますと……

・木下優子、キャラ崩壊注意

です。

なんかもう、違います。原作の優等生キャラどこ行ったって感じです。ま、後悔はしてないけどねっ。

それでは、お楽しみください。

第七問

「……優子、帰らないの？」
「もちろん、時雨君が来るまで待ち続けるに決まっているじゃない」

前回より五分が経過した現在。翔子は引き続いて、幼馴染が迎えに来るのを待っていた。隣には何故か、わくわくした面持ちで同じく彼を待つ優子の姿が。期待で落ち着かないのか、先ほどから手の上でシャープペンシルをクルクルと回し続けている。あれは確か、マルチプルとかいう技だっただろうか。十回転くらいしているようだ。

「あぁ……時雨君、まだ来ないのかなぁ……。もしかして、アタシに会うのが恥ずかしいとか！？」
「……それはない。大体、雪冬は優子のことを知らないはず。というかなんでそこまで自己終結できるの？」
「早く来てよ時雨君！　アタシもう待てないよぉ……」
「……はぁ」

キャラ崩壊も著しいＡクラスの才女、木下優子。目の前でどんどん壊れていく親友に、翔子は苦笑いでどんなことを思っているのだろうか。

（……優子、妄想モードと同じような顔してる……）

「あぁ、愛しの時雨君。アタシは今、人生で初めて気に入った男子に思いを打ち明けるため、乙女としてなにができるのでしょーか！　神様！　今だけはアタシに自分の思いを素直に正直にストレートに伝えるための愛と勇気と度胸をください？」

優子はだんだんと語調を強め、勝手にヒートアップしていく。二人のほかに教室に残っている優等生たちからの驚きと絶望の視線に、彼女は果たして気付いているのだろうか。

（……気付いて……ないだろうな……）

恋する乙女というのはここまで盲目なものなのだろうか。いや、彼女の場合は恋とは違うような気もする。実際に会ったこともないくせに、なぜ彼女はここまで盲信できるのだろう？　それほどまでに、時雨雪冬に魅力を感じたのだろうか。それとも、彼の年齢不相応の体躯が、ショタコンの優子にドツボったとでも言うのだろうか。翔子としては、なんとしても前者であってほしい。流石に親友がアブノーマルだとは思いたくない。

できればこのまま早々と帰宅してくれることを祈っていた翔子だが、その希望がついえるのはなかなかに早かった。

「（ガラッ）霧ちゃーん、迎えに来たよー。一緒に帰ろっ」

「……雪冬……」

知らぬが仏。彼を付け狙う獰猛な肉食獣がいるとも知らずに、雪冬は屈託のない笑みを浮かべたままAクラスの教室へと入ってきた。しかし、どうしてだろうか？　彼が入室してきたあたりから隣の親友が荒い呼吸を繰り返しているような気がする。それはまるで、シマウマの群れを前にしたライオンのようだ。

（……喰われる……！　このままじゃ、雪冬は間違いなく喰われる……ッ？）

法治国家日本で生まれ、育ち、暮らしてきた彼女の、衰えまくった野生の勘がガンガンと警鐘を鳴らしている。早くこの草食動物を逃がさなければ……社会的な死は免れないだろう。

そう結論付けると行動は早かった。翔子は音速で教材を鞄に詰め込み、学級日誌を教卓に置いて、さらに光速で幼馴染の下へと舞い戻る。黒曜石のような輝きを放ちながら揺れる黒髪がなんとも美しい。まさに大和撫子のようだった。

「……ゆき……と……っ？」

「アナタが時雨君ね？　アタシはＡクラスの木下優子。アナタのクラスメイト、木下秀吉の双子の姉よ」

「……？　（ズザザザーッ？）」

翔子、顔面から大理石の床へスライディング。なにやらとても鈍い音がしたようだが、大丈夫だろうか。華奢な彼女がずっこけた様子を見て、同じく教室に居残っていた眼鏡の少女、佐藤美穂が慌てて翔子に駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか、霧島代表？」

「……み、みほ……」

「はい。なんですか？」

「……ゆうこ、は……ヒトの限界を、超え……た……」

「あー……まぁ、言いたいことは分かりますよ。確かにあの速さは尋常じゃありませんでしたしね。まぁ、そう言う代表も余裕で人外レベルでしたけど。なに簡単に光速超えてるんですか。アインシュタインが首吊りますよ？」

もはや全生徒がボケに回ってしまっているAクラス。原作でも学力トップ3はボケ担当だ。純粋素直草食健気で貴重な眼鏡少女である彼女が自ずとツッコミに回るよりほかはない。今頃白髪のババァ長は頭を抱えて唸っているだろう。

なにやらクライマックスしている二人を他所に、獰猛肉食獣ユーコリンは雪冬との会話を進めている。

「へぇー、時雨君、こんな写真買ってくれたのね。体育中の体操写真なんて……」

「いや、その……流れでというか、つい……ご、ごめんなさい？」

「別に謝らなくてもいいわよ？　こんなのは思春期特有の麻疹みたいなものだし。それよりも、アタシのことを少なからず気にしてくれてるってことが嬉しいわ。ありがとね？」

「あ……ぇと……は、はい……」

「ふふっ、可愛いわね、時雨君」

最早すっかり自分のペースに雪冬を巻き込み、脱出不可能にしてしまっているユーコリン。自分の行いを全て了承された上に、滅茶苦茶綺麗な笑顔まで見せつけられた雪冬は今にもノックダウンされそうな勢いだ。心の奥がドンドンと跳ねまわっているのを彼は自認していた。

そして、ようやく回復（？）した翔子が自らの学生鞄を片手に雪冬の下へと飛来する。文字通り【飛来】である。なんかシステムデスクの上を飛び越えてきたのだ。そろそろ人間をやめているのではないかと美穂が本気で心配してしまうくらい、その姿は華麗で神々しい。今なら彼女が神だったと言われても大抵の人は信用してしまうかもしれない。学年主席にして、神。なんというステータスだろうか霧島翔子。学園最強となる日も近いか？

「……雪冬、そろそろ帰ろう」

「あ、うん。そうだね、もう六時も過ぎちゃうし」
「えぇー、時雨君、帰っちゃうの？　せっかく今からアタシの家で欲求解消と大人へのステップを同時に決行しようと思っていたのにーーーー」
「雪冬、ダッシュ。これ以上ここにいると貴方に危険が及びかねない」
「いつものスローペースを崩すくらい本気なんだね……」

初めて三点リーダーを使わずに話した翔子に、雪冬は頬を引き攣らせながら苦笑を見せる。原因となった少女はどこ吹く風の様子だが、もはやギャラリーと化しているAクラス生徒達の心中では確実に【木下優子＝変態】の方程式が成り立っていることだろう。学期開始よりおよそ一週間にして、優子の仮面は綺麗さっぱり剥がれてしまった。

「……雪冬……早く、帰る……ッ？」
「あ、え、ちょ……な、なんか霧ちゃんがすっごい剣幕でオレの右手を引っ張ってるから、もう帰るね？　話の続きはまた明日と言うことで良いかな？」
「あら残念。まぁでも代表の我儘なら仕方ないわね。また明日時雨君。……それと、最後に一つだけ」
「？」

首を傾げる雪冬を見て、優子は「ふふっ」と妖艶にほほ笑む。そして、全く状況の掴めていない彼の下へと近づくと、両肩を軽く掴んで――――

「ｃｈｕ☆」
「――――――――――――――っ！？」

自分の唇を雪冬の唇に勢いよく接触させた。突然のラッキーイベントに、雪冬はもう真っ赤である。伊勢海老もビックリな赤さ。人間とはここまで表情が豊かになれるのかと思ってしまうくらいの真紅。

（やぁ……ら、かぃ、なぁ……）

「んぐっ……んむぅ……」

「……んはぁ。……ふふっ、ご馳走様♪」

「……」

ぐい、と口元を拭いながら笑いかける優子。しかし雪冬は微動だにしない。……いや、そもそも完全停止以外の行動をとれないのだ。

十六年間生きてきた彼だが、彼女ができることはあってもこんなガッツリとした接吻をしたことはなかったらしく、目を虚ろにさせてその場に立ち尽くしている。傍らで翔子が必死に身体を揺さぶっているが、一向に覚醒する様子はない。初心な少年、時雨雪冬はなんの心の準備も一切ないまま、大人の階段を一段飛ばしで昇ったのだ。羨ましいなこの野郎。やはりリア充は死すべし。

「それじゃ、また明日。……これの続きもまた明日ね♪」

「……早く……帰れ……？」

「おー怖い怖い。そんなに怒らなくてもいいでしょ？　代表。別に代表は時雨君のことが好きってわけじゃないんだし。ねぇ？」

「……そういう問題じゃ、ない。私の親友に、そんな軽々しく手を出さないで……！」

「親友……ねぇ……。……本当に、代表が時雨君に抱いている気持ちはそんな程度のもなのかしらね？」

「……どういう、意味……？」

「なぁんでも。んじゃ、アタシはご希望通り早々と退散させてもらうとしますかっ☆　撤収～？」

「……ちょっ……優子……」

翔子の制止の声もどこへやら。優子は先ほどと同じくらいの速度で瞬く間に教室から出て行ってしまった。なんという才能の無駄遣い。陸上部にでも入ることをお勧めしよう。

いつの間にか周囲の生徒も下校してしまっていたようで、翔子は思考停止している雪冬と二人寂しく教室に取り残されていた。

そんな誰もいない空間で、翔子は若干遠い目をしながら、優子の言葉を反芻する。

「……そんな……程度……」

ただ呟いただけ。優子に言われて言葉を呟いただけなのに。

不思議と、翔子は胸の奥がチクリと痛むのを確かに感じていた。

☆

「たっだいまぁ～☆」

「む？　おぉ、お帰りなのじゃ、姉上」

元気よく扉を開け放ち帰宅を宣言した優子を、ジャージ姿の秀吉が出迎える。既に風呂には入ってしまっていたようで、彼の全身からは湯気がもうもうと立ち上っていた。

そんな可愛らしい弟の姿に再び微笑みつつ、優子は居間の方へと足を進める。

「～～～～♪」

「なんじゃ、今日はまた随分とご機嫌じゃのう」

「あら、分かる？　アタシが滅茶苦茶浮かれてるの、やっぱり分かっちゃう？」

「当然であろう。ワシが姉上と一体何年一緒にいると思っておるのじゃ？　これくらいの判断、朝飯前はおろか夜食前じゃよ」

「それってある意味ダメダメな喩だけどね」

秀吉の頭の悪さもどうやら筋金入りらしい。真顔で間違える秀吉に優子は苦笑しつつもブレザーを脱ぎ始める。

「して、一体なにがあったのじゃ？　こう言うのもなんじゃが、姉上が学校生活で機嫌が良くなるというのは珍しいことこの上なくてのぅ」

「んっふっふ。それがねぇ……秀吉、アンタのクラスに転校生が来たでしょ？」

「あぁ、雪冬のことかの？」

「そうそう、その時雨君。放課後、その彼とお会いする機会があったんだけどね……」

そこで一旦言葉を切ると、優子は口元に妖しい笑みを浮かべ、笑顔で言った。

「キス、しちゃったんだ☆」

「……は？」

姉の突然のカミングアウトに、秀吉はただただ目を丸くして呆然とするしかなかった。

第七問（後書き）

雪冬「ゆっきーちゃんねるぅ～……」

雄二「なんだ雪冬。今回はなんか随分と元気がないじゃないか」

雪冬「いやさ……本編で、オレ、木下さんにキスされたじゃない？」

雄二「あぁ、あの木下姉が暴走したやつか。佐藤の奴もなんかドン引きしてたな。……それで？　それがどうかしたのか？」

雪冬「あの後、帰り道で霧ちゃんにすごい剣幕で責められるし、家に帰ってからもどこで番号を入手したのか木下さんから十分おきくらいに電話がかかってくるしで……」

雄二「ヤンデレとストーカーに目をつけられるとか、お前も運がないな」

雪冬「ひ、他人事だと思ってぇ！　だいたい霧ちゃんはゆー君の管轄でしょ！？　なんでオレの方に来るんだよー？」

雄二「俺が知るか。ていうか、翔子は別に俺の管轄じゃねぇ！」

雪冬「……あ、霧ちゃん」

雄二「（ダッ）」

雪冬「うん、予想通りの反応をありがとう。ちなみに嘘だからね？」

雄二「殺すぞテメェ」

雪冬「返り討ちにしてあげるよ」

雄二「けっ……とにかく、もう時間が来たみたいだな」

雪冬「ゆー君をからかう時間が終わるのは悲しいけど、こればっかりは仕方ないね。感想、助言、などなどお待ちしています」

雄二「……お前ホント一度真剣に話し合った方がいいみたいだな」

雪冬「なんのことだろうね。……それじゃ、また次回お会いしましょう」

二人「「さよーならー」」

第八問（前書き）

第八問

Bクラス戦が終結した次の日。
勝利の余韻に浸るFクラス生徒を目前にして、クラス代表坂本雄二は教壇に両手をついた状態で演説を開始していた。

「さて、まずは皆に礼を言いたい。俺達みたいな底辺野郎がここまで来れたのは、まぎれもなく皆の協力のおかげだ。大変だったと思うが、本当にありがとう」
「ど、どうしたのさ雄二。らしくないよ？」

雄二の珍しい態度に、隣に立っていた明久が戸惑いの表情を見せる。プライドの高い雄二は基本的に他人に頭を下げることを嫌うため、明久は彼がお礼を言うところなんていうのを見たことがなかったのだ。

「あぁ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ。隠す必要なんてないだろう？　素直に、皆には感謝している」
「そう言われると、ワシらも感慨深くなってくるのう」
「……長かった」

秀吉、康太を始めとしたクラスの全員がしみじみとした表情を見せる。所詮は学年最下層と馬鹿にされながらも、今にも最高峰クラスに手をかけようとしているのだ。感動も一入だろう。

「ここまで来たからには、絶対に勝ちたい。だが、そのためには皆の協力が不可欠だ。無謀な賭けだと思うだろう。命知らずだと思うだろう。だが、本当にそうなのか？　勉強ができないからって、人の上に立ってはいけないのか？　……そんなことはない。皆、世の中は学力だけじゃないということを、Ａクラスに見せつけてやろうじゃないか！」

『おぉーっ！』

『そうだそうだー？』

『学力がなんだってんだー！』

雄二の煽りに反応するように、クラスメイト達が叫び声を上げていく。そんな彼らの挙動を見て、雄二は満足そうに頷いた。

しかし、ここで彼は一つの違和感にようやく気付く。

「おい明久。雪冬のやつはどうしたんだ？　さっきから自分の席で窓の方を見つめたまま動かねぇんだが」

「あー……なんか、昨日Ａクラスでいろいろあったみたいだよ？　詳しくは秀吉から聞いた方がいいと思うけど……」

「Ａクラスで？」

――――また翔子がなにかやったのか？

黒髪の幼馴染の顔を思い浮かべながら、雄二は雪冬の方を見やる。

……なにかとてつもなく真っ白な灰になっているのは気のせいだと信じたい。

「……とりあえず、だ。今回のＡクラス戦だが、俺と翔子の一騎打ちでやろうと思っている」

「一騎打ち？　……馬鹿の雄二が天才の霧島さんに勝てるわけがなぁぁあ！？」

瞬間、余計なことを口走った明久の頬をカッターナイフがかすめた。ツー……と流れ落ちる自分の血液を見ながら、明久は全力で土下座を開始。保身のためならプライドさえも捨てる。それが吉井明久の真骨頂。

やれやれ、と嘆息しながらも、話を再開する。

「なにも普通の召喚獣勝負でやろうとは言ってない。いくら神童と言われていたといっても、今は落ちぶれたただのクズだ。学力最高潮の翔子に勝てるワケがない」

「だったらなんで僕は殺られかけたのさ……」

「明久（バカ）だからだ」

「酷い！」

ドラマのワンシーンのような泣き崩れを見せる明久。だが、雄二はそれを華麗にスルーする。

「勝負は『日本史小学生レベル・点数上限ありの百点満点テスト』で行うつもりだ」

「小学生レベル、ですか？　何年に、誰が何したかっていう……」

「まぁそんな感じだな。他の科目なら勝ち目はないが、コイツなら俺は確実に翔子に勝てる。なぜなら、アイツは一つだけ勘違いして覚えている問題があるからだ」

「……大化の改新、だっけ？　ゆー君が間違えて教えたのは」

「お、やっとお目覚めか？　雪冬」

「まーね……まだ本調子じゃないけど」

ヨロヨロと今にも打ち倒されそうな雪冬が須川の手を借りて雄二の下へと歩いてくる。まさかこの草食系男子は昨日の木下優子事件だけでここまで戦闘不能になっているとでも言うのか。どこまで弱

いんだと声を大にして叫びたい。

「えーと……つまりどういうことなの？」

「オレとゆー君が幼馴染なのは知ってるよね？　んで、実は霧ちゃ……霧島翔子さんもオレ達の幼馴染なんだ。同じ小学校で、家も近かったからね。そんなわけで――――」

「総員戦闘準備！　裏切り者坂本雄二を血祭りに上げるんだ？」

『『了解です！　隊長！』』

「ちょっと待て！　なんで今の流れから俺を襲いにかかる!?　それにどうして明久の号令一つで全員がカッターナイフを構えるんだ！」

流石はFクラスといったところか。他人の不幸は蜜の味。他人の幸せは摘み取ろう。清々しいほどのクズっぷりに最早感嘆のため息を漏らしそうだ。

冷や汗意だらだら書く雄二。そんな彼に明久はハイライトを失った瞳で淡々と呟く。

「貴様ぁ……あの才色兼備の霧島さんと幼馴染だってぇ？　どれだけ僕達の神経を逆なでですれば気が済むんだ」

「待つんだ明久！　そもそも俺だけやられるという点がおかしい！　雪冬だって同じ立場だぞ!?」

「雪冬はあんな状態だからやりにくいんだよ！　それなら二人分の恨みをキサマに晴らすというのはいたって当然？　日ごろのアレコレも一緒に――――待つんだ新田君。その瞬間接着剤は口の中に靴下を詰め込んでから塞ぐときに使うものだ」

『盲点でした、隊長』

「見失いすぎだ！　他にももっと大切な所を見てくれよ！」

哀れ雄二。男子高校生四十七人に囲まれてはいくら悪鬼羅刹とい

えども逃れる術はないだろう。
しかし、そんな彼を助けるかのようにパンパンと平手を打つ音が教室中に木霊した。
島田美波だ。

「まぁまぁ。落ち着きなさいよアンタ達。相手はあの霧島翔子なのよ？　こんなゴリ……坂本とどうこうあるとは思えないじゃない」
「オイコラ。今ぜってぇゴリラって言いかけただろ」

やはり彼への態度は学園全体の総意のようだ。

『む、それもそうか……』
『むしろ、あるとすれば……』

じっ、と一人の人物を見つめるＦクラス生徒達。彼らのそんな視線に気づいた件の女子生徒は、その長髪と同じような色に頬を染めながらオロオロと狼狽える。

「な、なんですか？　もしかして私何かしましたか？」
「……いや、なんでもないよ姫路さん。うん、そうだ。なんでもないに決まってるさ」
「なんかすっごく無理矢理誤魔化された気がするんですけど……」

――――確かに何もやってないけど、何かされる可能性は大だな。
雪冬、雄二、瑞希を除くクラス四十九人の心が一つになった瞬間であった。

「と、とにかく。俺と雪冬、翔子は幼馴染で、嘘を教えてしまったんだ。『大化の改新が起こったのは６２５年』とな」
「え？　大化の改新って『７９４年』じゃないの？」

『『『……』』』

まさかの間違いに全員が絶句した様子で明久を見る。観察処分者の名は伊達じゃないという所か。まさか小学生レベルを間違えるとは夢にも思わなかった。

そんな彼を一瞥し、雄二は言葉を続ける。

「答えは『６４５年』。こんな簡単な問題はいくら学園最底辺の観察処分者であるどっかの馬鹿でも間違えない」

「見ないで……僕を見ないで……」

「アキ君……まさかここまでバカだったなんて……」

転校してからおよそ二日。彼の中で明久の評価は『どうしようもないバカ』に決定した。

「アイツほどの学力なら、普通ならば間違えない。しかし、翔子は確実に間違える。これは断言できる確かな事実だ」

「霧ちゃんはゆー君の言うことを鵜呑みにして、間違えた答えを記憶しちゃってるから、テストで出れば絶対に『６２５年』って書いちゃうんだ。昔もそうだったから、多分今のそうだと思う」

「……幼馴染コンビが言うのなら、本当なのじゃろうな」

「……説得力がある」

「……そういうわけだ。とにかく、この問題が出れば、俺達は勝てる」

「うん、そうなれば……」

『『『システムデスクだ？』』』

「よし、野郎ども！　俺に懸けてくれ！　任せてくれ？　絶対に、勝利を掴みとって見せる？」

拳を握り、天井に向けて突き上げる。今、彼を中心にしてFクラスは一つになっていた。
雄二の言葉に、全員が一様に頷く。

「第二学年試験召喚戦史上、前代未聞の下剋上を成し遂げてやろうじゃねぇか？」
『『『うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお？』』』
「俺達は……最強だ？」

最底辺クラスのプライドと意地をかけ、彼らは王者の首を獲りに立ち上がる。

☆

とあるムッツリの盗聴器記録より抜粋。

『……ゆー君』
『ん？　どうした雪冬』
『相手はあの霧ちゃんなんだ。間違っても油断はしないでよ？』
『分かってるって。大体、小学生レベルの問題なんだぞ？　間違え

るわきゃねぇだろ』
『……キリスト教が日本に伝来したのは？』
『【雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った１９９３年】』
『……』
『……』
『勉強……しなさい……っ？』
『はぁっ！？　今何か間違えたか！？』
『全部だよ全部！　年号も違うし大体なんで昭和時代にキリスト教が来るのさ！　【以後よく（１５４９）広まるキリスト教】だから１５４９年でしょう！？』
『……真面目に、勉強します』
『ホント頑張ってよ……』

第八問（後書き）

雪冬「ゆっきーちゃんねるぅ～☆」

雄二「……（カリカリカリカリ）」

雪冬「えー、ゆー君は只今来るＡクラス戦に向けて猛勉強中です。小学生レベルの日本史を」

雄二「関ヶ原の戦いは１９５８年……白村江の戦いは１１９２年……」

雪冬「……うん、なんかもう色々と前途多難だけど、頑張ってもらうしかないね」

雄二「第二次世界大戦終結は２００６年……ポツダム宣言は１５４８年……」

雪冬「待つんだゆー君。年号がどうとか言う前に戦争と宣言の前後関係が破綻しちゃってる」

雄二「……よし、これでもう完璧だな」

雪冬「最初から答えみてやり直せー？」

～～～諸事情により今回はここでお別れです～～～

感想、お待ちしています♪

第九問（前書き）

こんにちは。大晦日のギリギリに更新します、ふゆいです。
今回は急ピッチで仕上げました。出来はどうでしょうね（笑）
おそらくこれが今年の最後の更新となります。来年もよろしくお願いしますね？
それでは、お楽しみください♪

第九問

「一騎打ち？」
「あぁ、そうだ。俺と翔子、代表同士で正々堂々な」

Ａクラス教室にて。雄二、明久、雪冬を始めとしたＦクラス主要メンバーたちは、Ａクラスとの試召戦争の交渉に来ていた。
交渉のテーブルに座っているのは我らが神童、坂本雄二と、Ａクラス参謀係、木下優子だ。会話の最中にチラチラと雪冬の方へ視線を向けているように見えるが、これは彼の社会的純潔を守るためにあえて伏せておこう。
雄二の提案に、優子は眉を顰める。

「ずいぶんと魅力的なお願いだけれど、一体何が狙いなのかしら？」
「おいおい、人聞きが悪いな。俺はただ単純に翔子との一騎打ちと言う形でＡクラスとの試召戦争の宣戦布告に来ただけだぜ？」
「よくもそんなことを真顔で言えるわね。あなた自分の立場が分かってるの？　学年最低クラスの代表が最強クラスの代表に一騎打ちですって？　冗談も大概にしておきなさい。先天的才能と根性だけで努力に勝てるのは、創作世界の話よ」
「……取りつく島もなし、ってか」

優子の有無も言わせない高圧的な物言いに、雄二は嘆息しながらボソリと呟く。

木下優子は努力家だ。自分の前に置かれたハードルは、何が何でも飛び越えないと気が済まないような、典型的な努力家。彼女のその性格は、日常生活だけではなく勉学、そしてスポーツにも影響する。霧島翔子が才能の天才なら、優子は努力の天才。彼女の中では、すべてのことが努力次第で乗り越えられる。

そんな彼女だからこそ、雄二の提案が許せなかった。何も努力しないような人生の落ちこぼれ達が、努力して頂点に君臨するAクラスに喧嘩を売ること自体、バカにしてるとしか思えない。

優子は嫌悪感を隠すこともなく、淡々と言葉を続ける。

「大体、不自然すぎるでしょう？　Aクラスの代表って、いわゆる学年主席なのよ？　第二学年において、最強の名を冠する者。三下集団のボス猿ごときが、どうして万が一にも勝てるとか思ってるわけ？」

「世の中は学力だけじゃねえ。確かに俺達は馬鹿でどうしようもないクズさ。だが、だからといって絶対に勝てないなんて誰が決めた？　力で及ばないから、ひれ伏すしかないなんて誰が言ったんだ？　俺はやる、やってみせる。人生の最底辺が、真の下剋上を達成するところをお前らに見せつけてやる」

「とっても素晴らしい布告文ね。でも、無理よ。絶対に無理。世の中にはなにをしようとも覆せない差というものが存在するの。それは学力がどうこうとか言う前の、根本的な差。貴方は人生で失敗している。対して、代表はこれ以上ないほどの成功例。これがどういうことか貴方に分からないわけじゃないでしょう？　元・神童さん。そう、神童だからこそ、貴方はこの言葉の意味が分かるはず」

「……あぁ、その通りだ」

優等生が劣等生を非難する。ありふれた光景だが、双方がその極みと言ってもいい存在だからか、より一層社会的な差を明示してくれる。雄二は優子の言葉に反論することなく、素直に頷いた。

しかし、彼がそこまで言われたのを見て、一人の生徒が怒りを露わにする。

「そ、そこまで言わなくてもいいでしょ！？　ゆー君やアキ君にだって勝機はあるはずだよ！　それを、真っ向から否定するなんて……」

「時雨君。貴方の言いたいことも分かるわ。なんで彼らのすべてを否定するのか、でしょ？　でも、アタシは間違ってないわ。だってそうでしょう？　なんの努力もしない人間に、一体どれほどの価値があるっていうのよ」

「ゆー君は努力してるよ！　その矛先がたまたま勉強じゃないってだけで、ゆー君もアキ君も、そしてFクラスのみんなも何かしら努力はしてる！　木下さんにそこまで言われる理由なんて、これっぽっちもない！」

「『何かしら』……ね……。でも、学生の本分は勉強よ。しかもここは進学校。勉強こそが、この学園のステータス。そもそも進学校に通ってるのに勉強しないなんて、どういうことなのかしら？　そんなに勉強が嫌ならどっかの馬鹿高校にでも行けばよかったじゃない」

「ぐ……」

言い方はキツイが、優子の言うことは正論だ、おそらく、世の中の大部分が彼女の言葉に賛同するだろう。

学生に与えられる仕事は勉強。いくら部活や習い事を頑張っていたって、優先順位は勉強に及ばない。彼らはあくまでも『社会に適用するための材料』でしかないのだ。世界というパズルを作り出す、ひとかけらのピース。それが子供たちの存在意義。

それなのにその意義を見失い、勉強を諦めるものは同時に社会から見捨てられたといってもいいだろう。それで生活していくならいざ知らず、中途半端なものは社会にはいらない。自分たちの利益に

ならない存在など、社会は必要としていないのだ。
優子の言葉にFクラス勢が揃って口を噤む。……が、雄二だけは違った。
顔に手を当て、突然「ククッ」と笑い出したのだ。

「な、なにがおかしいのかしら？　坂本君。アタシの言葉にどこか面白いところでも？」
「……あぁ、あったね。それも存分にな。アンタが話してる間笑いをこらえるのに必死だった。ようやく終わってくれて感謝してるぜ」
「……貴方、アタシに喧嘩売ってるの？　アタシは間違ってない。貴方達みたいな社会のクズは、成功者には勝てないのよ！」
「……なら、どうしてそこまで俺の言葉で動揺するんだ？」
「っ」

一瞬、下手すれば見逃してしまうくらいに、優子の表情筋が引き攣った。心なしか冷や汗をかいているようにも見える。
そんな彼女の反応に満足そうに笑いながら、雄二は交渉を開始した。

「アンタが俺の言葉で狼狽えるってことは、なにか心当たりがあるってことだ。社会スキルではすべて上回っているのに、何もできないクズに負けた経験があるってことだろ？」
「そ、それは……」
「そうだなぁ……さしずめ、アンタが可愛がっている弟君ってところか？　何かで秀吉に負けて、それからずっと心の奥底でそれを恨んできた」
「な、なにを出鱈目なことを……秀吉はアタシの大事な弟よ？　かけがえのない家族。それなのに、なんでそんな感情を持たないといけないワケ？　口から出まかせもいい加減にしてくれるかしら」
「確かに、それが本当かどうかは俺には分からねぇ。だが、アンタ

には分かるはずだ。弟に対する劣等感。同時に湧き上がる、姉としての尊厳。優秀な姉としての、大きすぎるプライドがな」

「……」

先ほどとは打って変わって大人しくなる優子。どうやら、図星だったらしい。

「姉上……」

そんな姉の姿を、秀吉は心配そうに見つめる。憧れの姉がここまで打ちひしがれるのを、彼は今まで見たこともなかったからだ。

「……そこまでにして、雄二」

「……翔子か」

そうして、ようやくお目当ての人物が姿を現した。

Aクラス代表であり、学年主席。雄二と雪冬の幼馴染である少女、霧島翔子だ。

「……さっきの話、私は受ける」

「だ、代表……？　そんな、バカなことを……」

「……うぅん、いいの。でも、一騎打ちだけじゃダメ」

「……どういうことだ？」

「……AクラスとFクラス、それぞれ五人対五人の一騎打ち勝負。科目選択権はすべてFクラスに与える。そして、負けた方は勝った方の言うことを一つだけ絶対に聞かなければならない。……この条件なら、受けてもいい」

ザワ、とAクラスの教室にどよめきが広がる。学年主席がFクラス相手にマトモな条件を提示したのだ。しかも、命令権もアリだと

いう。プライドの塊である彼らからしてみれば、信じられないにもほどがあった。
しかし、翔子の提案に雄二は野性味たっぷりの笑みを浮かべて頷いた。

「オーライ。その条件で行こうじゃねぇか」
「ゆ、雄二！　何を勝手に決めてるのさ。姫路さんの許可とか全くもらってないのに……」

何故か慌てた様子で雄二に詰め寄る明久。どうやら学園に広がっている『霧島翔子は百合』という噂をすっかり真に受けているようだ。隣では康太が必死にカメラの点検を始めている。最初から負ける気だろうか、このムッツリは。

「大丈夫だ、姫路には迷惑をかけねぇ」
「かけないって……そんなのは雄二の決めることじゃ……」
「大丈夫だよ、アキ君。ゆー君を信じなって。ゆー君はこう見えても、オレ達のことを第一に考えてるんだからさ」
「雪冬まで……あぁもう！　どうなっても知らないからね！？」

そもそも瑞希にはどうともならないのだが、勘違い全開の明久は呆れた様子で引き下がった。知らぬがなんとやらとは本当のようである。

「それじゃ、今日の夕方四時に開戦ってことでいいか？　こっちにも色々と準備があるんでな」
「……わかった。じゃあ、四時にＡクラスで」

代表同士が握手を交わす。
こうして、Ａクラス対Ｆクラス。前代未聞の試験召喚戦争は、夕

方四時より開戦と相成ったのだ。

第九問（後書き）

雪冬「ゆっきーちゃんねるぅ～？」

雄二「ひゃっほう」

雪冬「さて、年末カウントダウンを目前に、今回も始まりましたゆっきーちゃんねる。司会はおなじみ時雨雪冬ですっ」

雄二「アシスタントの坂本雄二だ。六時半からテレビを見たいから早くしような」

雪冬「『ガキ○か』だね！　オレも楽しみでしょうがないよ！　でも、今はラジオに集中しようね！」

雄二「へいへい」

雪冬「さて、今回はゆー君と木下さんの熱い口論が繰り広げられたけど……なんか賛否両論が出そうな勢い」

雄二「まぁ社会的な考えは人それぞれだからな……ただ、俺は俺。木下姉は木下姉の立場で意見しただけだから、お互いにいいんじゃないか？　後は個人しだいだろ」

雪冬「さすがゆー君。自分に降りかかる火の粉を必死に払ってるね！」

雄二「フォローといえ、フォローと」

雪冬「次回はとうとうＡクラス戦！　先鋒ははたして誰なのか！」

雄二「まぁそれは来年に持越しだな」

雪冬「感想、助言、お待ちしてます！」

雄二「『ゆっきーちゃんねる』で読んで欲しい質問や要望も、どしどし募集してるぞ」

雪冬「それでは、来年も皆様に幸があることを祈りまして……」

雄二＆雪冬「「よいお年を～♪」」

第十問（前書き）

こんにちは。そしてあけましておめでとうございます。ふゆいです。

年始から更新します。まぁこれが僕の力の源ですしね！

みなさま今年もどうかよろしくお願いします。

それでは、お楽しみください。

第十問

「では両名共、準備はよろしいですか？」
「あぁ」
「……はい」

Ａクラスの教壇に立っているクールビューティな学年主任、高橋洋子が場を取り仕切る。双方にはそれぞれの勝利を信じ、強く見守っている両クラス生徒達の姿があった。

「それでは、一人目の方どうぞ」

高橋が先鋒の出陣を促す。それの応じて、Ａクラス側からはライトグリーンの色をした短髪の少女、工藤愛子が意気揚々と歩いてくる。一年の終わりに転入してきたため彼女を知る者は少ない。得意教科、弱点、性格……Ｆクラスにとってそのすべてが謎に包まれていた。

対するＦクラス陣営からは、物静かな印象の少年、土屋康太が歩み出た。通称【寡黙（ムッツリーニ）なる性識者】と呼ばれているだけあって、保健体育なら誰にも負けないほどの実力を持っている。雄二も、ここは安全牌だろうとタカをくくっていた。

「ボクが相手になるよ、Ｆクラスさん」
「……よろしく」

お互いに近づき、握手を交わす。どちらも表情を崩さない。それほど自信を持っているのだろう。

高橋の問いかけに、康太は【保健体育】を選択した。

「へぇ……キミ、保健体育が得意なんだ？」

「……それほどでもない」

「またまたぁ、この場面で保健体育を選んでる時点で丸わかりだって。……でも、残念だったね」

「……なんだと？」

「ボクも保健体育が得意なんだ。それも、キミとは違って……」

愛子はそこで一旦言葉を切ると、口元に手を当てウインクを一つ。

「実技でね☆」

『『『？（ブッシャァァアアアアアアアアア？）』』』

彼女の衝撃的な発言に、Ｆクラス生徒がノックアウト。ほぼ全員が自らの鼻血の海におぼれている。

しかし数少ない生き残りだった雄二と明久は、自分の鼻を拭いながら反論を開始した。

「まったく、見た目と違って油断できない女だぜ、工藤愛子」

「そうだね。男子の純情を弄ぶなんて許せないよ」

「お主ら……本音と建前が混ざっておるぞ」

「丸わかりだね……」

どこまでも欲望に正直な二人に、秀吉と雪冬は嘆息するしかなかった。

「明久君？　明久君にはそんな知識いりませんよね……？」

「そうよ、アキ。だから意味のないお願いはしないようにね……アンタの身の安全のためにも」

どっかの観察処分者の身には危険が迫っていたが。

「……そろそろ召喚を開始してください」

「はいはいっ、試験召喚っと」

「……試験召喚」

喚び声に応じて、二人の姿をした召喚獣が姿を現す。康太はいつも通りの忍者装束に一対の小太刀。対する愛子は……

『な、なんだあのバカでかい斧は!?』

見るからに強力そうな巨大な斧。しかも例の如く能力腕輪まで装備していた。ということはかなりの実力者と言うことになる。これはなかなか危険かもしれない。

「実践派と理論派、どっちが強いか思い知らせてあげるよ」

愛子が艶っぽく微笑む。それと同時に、愛子の召喚獣は斧を振り上げ突っ込んでいった。バチバチと紫電が散っているのは、腕輪の能力だろうか。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君!」

そして剛腕で斧を振るった。タイミングからして、これは避けられる攻撃ではない。

「ムッツリーニっ!」

明久が叫ぶ。Ｆクラスの切り札に最大のピンチが襲い掛かっていたからだ。

……しかし、明久は失念していた。

彼もまた、普通の生徒ではないということに。

「……加速」

瞬間、斧に両断されるはずだった康太の召喚獣の姿が、霧のようにブレた。

「……え？」

愛子が豆鉄砲を食ったような顔になる。他の生徒も一様にそんな表情をしていた。彼の召喚獣はなぜ工藤の射程範囲外にいるのだろうか？

困惑が広がる中、康太は勝ち誇った表情で静かに呟く。

「……加速終了」

そして、愛子の召喚獣から大量の血しぶきがあがった。

『Ａクラス　工藤愛子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太
保健体育　４４５点　５６９点』

「つ、強い……下手すると僕の総合点数並だ……！」

若干情けないような明久の呟きが、静まり返ったＡクラス教室に木霊する。驚く明久に、雄二はワシャワシャと髪を掻きながら説明

した。

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからなー……ま、こんなもんだろ」

恐るべし土屋康太。保健体育界の王者は、やはり伊達ではなかった。

「そ、そんな……この、ボクが……？」

「……ふん」

肩を落としがっくりと落ち込む愛子を背にして、康太は堂々と仲間達の元へと帰還した。その姿は、まるで歴戦の勇者の如く。

帰ってきた康太が胴上げされる姿を横目に見つつも、高橋は静かに司会をこなしていく。

「……まずはFクラスが一勝です。さて、次の方は？」

「私が行きます、高橋先生」

そう言って現れたのは、眼鏡とボブカットが特徴的の少女、佐藤美穂。別名【Aクラス唯一のツッコミ役】である。

信頼する仲間が瞬殺されたせいだろうか、その顔には苦悶の表情が浮かんでいた。

「……さて、とうとうお前の出番だぞ、明久」

「えぇっ！？　ぼ、僕なのっ？」

まさかこんな重要な場面で指名されるとは思わなかったのだろう。目に見えて後ずさる明久。

雄二は何を考えているのだろうか。

「大丈夫、お前ならやれる。それに、お前はまだ本気を出していないだろう？」
「……ふぅ、そこまで言われちゃ仕方ないね」
扱いやすいヤツだ、という雄二の呟きも聞こえないのか、自信満々に中央へ。
彼の意外なほどの強気に、美穂がたじろいだ。
「吉井君、でしたか……あなた、もしかして……」
「うん、そうだよ。今までの僕は全く本気なんか出しちゃいない。……高橋先生。教科は【世界史】でお願いします」
「くっ、試験召喚！」
「試験召喚」
例の如く、二人の召喚獣が顕現する。
両手に鎖鎌を持った美穂の召喚獣。その武器もまた使用法に頭が必要とされる代物だ。
そして、いつものように改造学ランに木刀を持つ明久の召喚獣。
だが、心なしかいつもに比べて凛々しくなっている気がする。なぜだろうか。
召喚獣の頭上にそれぞれの点数が表示される。
『Ａクラス　佐藤美穂　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久
世界史　２４５点　９４点』
勝負は一瞬で決着がついた。
「このバカ！　あそこまで啖呵切っておいてこのザマはなによ！？」
「い、痛いよ美波！　ただでさえフィードバックで痛んでるんだか

ら、さらにダメージを加えないで！」

情けないにもほどがある敗北を喫した明久を美波は関節技でフルボッコに。やはり吉井明久はどこまでいっても吉井明久だった。

「……やっぱり負けたか、雑魚め」

「キサマ雄二！　お前最初から僕のことを信用してなかったな！？」

「誰もお前が勝つ方に信用していたとは言ってない！」

「コイツに本気を出して殺したい――――――――？」

そして雄二の応対も相変わらずだった。

「……さて、これで一対一ですね。次の方、前へ」

「それじゃあ、僕が行こう」

「わ、私が行きます！」

久保利光。姫路瑞希。

お互いに学年次席をかけて切磋琢磨していた二人が、そろって歩み出る。

「だ、大丈夫なの？　姫路さん。久保君は強いよ？」

「はい、大丈夫です♪　私を信じてください」

心配する明久に瑞希は優しく微笑みかける。その光景に久保は隠しもせずに舌打ちをした。どうやら彼の薔薇疑惑は本当のようだ。

一瞬明久の身体に寒気が走ったのは気のせいではなかろう。

「科目はどうしますか？」

「あ、えと、総合科目でお願いします！」

「……ふ、ずいぶんと自信があるようだね、姫路さん」

「……私、このクラスが好きなんです。クラスのメンバーも、雰囲気も、優しさも全部全部……全部が、大好きなんです」
「そうか。だが、それがいったいどうしたというんだい？　僕には関係ない。そんなことを言われても、手を抜く気は一切ないよ」
「……分かってます。試験召喚」
「試験召喚」

二人の召喚獣が魔方陣の上に現れる。そして、点数が表示された。

『Ａクラス　久保利光　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　３９５４点　４４２６点』

「ぐ……姫路さん、君はいつの間にこれだけの力を……！」

点数差４００点オーバー。久保は決して弱いわけではない。それどころか第二学年においては二位の成績を誇る猛者だ。その頭の良さは計り知れない。だが、瑞希はそれを凌駕した。それも前代未聞の点数差で。その事実に、久保は悔しそうに歯噛みする。
瑞希は静かに呟いた。

「私、考えたんです。人はどうすれば頑張ることができるのかって。自分のためだけに、努力する人なんているのかって」
「……」
「そして、私はこう思います。好きなものがあるから……好きな人がいるから、その人の為に人は頑張ることができるんだって」
「でも……それでも！　人は一人でやっていかなければいけない！」

久保は召喚獣に武器を構えさせ、瑞希の召喚獣へと突っ込ませる。
だが、瑞希はそれを軽くいなすと、腕輪の能力【熱線】で蹴散らした。力の差は、歴然。

「ちがいます！　確かに人は一人です。悲しい時も、自分でどうにかしないといけないかもしれない。でも、違うんです！」
「何が違うというんだ！　人間は己の力を信じるんだよ！？　それ以外、なにもいらない！」
「人は！　人は……！」

誰かが手を差し伸べてくれるから、諦めずに生きていけるんです！」

「くっ……」

熱線に飲み込まれ、久保の召喚獣が跡形もなく消滅する。Ｆクラスからは歓声が上がり、Ａクラスからは落胆の声が上がった。
力なく項垂れる久保。そんな彼に、瑞希は彼女特有の優しい笑顔で右手を差し伸べた。

「さぁ、これからも頑張りましょう。貴方は私の好敵手なんですからっ」
「……あぁ、そうだね」

応じて久保も屈託のない笑みを浮かべた。今の彼に、先ほどまでの歪んだ考えはない。ただ、力を比べあうことのできるライバルに、リベンジを誓って。

Ａクラス対Ｆクラス試験召喚戦争。

途中経過

一対二でＦクラスの優勢。

第十問（後書き）

雪冬「ゆっきーちゃんねるぅ～♪」

雄二「おー」

雪冬「さて、２０１２年一発目のゆっきーちゃんねる。司会はおなじみ時雨雪冬です！」

雄二「アシスタントの坂本雄二だ」

雪冬「今回は原作の戦いが三つあったね。勝敗も原作通りかな？」

雄二「そうだな。まぁこんなところだろ。ここは絶対に崩せない場所だしな」

雪冬「残すはオレとゆー君だけだけど……どうなるのかな？　楽しみー！」

雄二「どうせ滅茶苦茶になるんだろ？　期待できるのか、あいつは」

雪冬「まぁまぁ。とりあえず皆様の期待に応えるように頑張っていこうと思います！」

雄二「適当に締めくくったな」

雪冬「うるさいよ！　とにかく！　次回もお楽しみに！」

雄二「今年もよろしくな」

第十一問（前書き）

こんにちは。正月は余裕があっていいなと思うふゆいです。
今回もAクラス戦。はてはてどうなることやら。
それでは、お楽しみください。

第十一問

一対二でFクラスが優勢。
下手すると次の一手で勝負が決する大一番。絶体絶命の状況にAクラス陣営は戸惑いを隠せない。

「……さて、どうする？　代表かアタシ、どっちかが行かないとダメなんだけど……」
「……私が行く」
「へぇ……一応、理由を聞かせてもらってもいいかしら？」
「……うん」

翔子の意外な立候補に、優子は目を細めながら彼女の方を見つめる。こう見えても翔子はFクラス代表坂本雄二の幼馴染。自分なんかよりよっぽど対策を講じているだろう。
優子の視線に、翔子は淡々と話す。

「……午前中の交渉のときから分かるように、雄二は私との対決を望んでいる。理由とか、詳しい事情はちょっと言えないけど……私が行けば、確実に雄二が出てくるはず」
「時雨君が出てくる可能性は？　あの子も代表と幼馴染だったはずだけど」
「……多分、ない。雪冬は基本的に雄二の意見を尊重するから、彼が出てくる可能性は低いと思う。仮に雪冬が立候補しても、雄二が止めるはずだから、どっちにしても相手は雄二」

「でも坂本君だって代表との一騎打ちを望むくらいだから、なにか一発逆転の起死回生作戦とかを考え付いているかもしれないわよ？もしそうだとしたら、代表はどうするつもり？」

「……大丈夫」

翔子はそこで一度言葉を切ると、その瞳に先ほどとは違う強い輝きを宿して言った。

「……多分、それでも雄二より私の方が強いから」

☆

「それでは四人目の方、前へ」

「だってさ、雄二。次は誰が出るの？」

高橋の呼びかけを聞いて、明久が雄二に問いかける。現段階でリーチをかけているFクラス側にとってはここで決着しておきたいところだ。

静かに黙考する雄二。そんな彼に雪冬が話しかける。

「相手は多分木下さんか霧ちゃんだろうね。上位層から見て、精鋭陣だろうし」

「あぁ。木下姉ならお前をぶつけて万々歳なんだけどな……ここで翔子が出てくると厄介なことになる」
「……ゆー君が無駄な意地張らないでオレに行かせてくれればいいのに……」
「うるせえ。お前だって了承しただろうが。今更グダグダ言うなよ」
「そうだけどさぁ……でも下手すると逆転負けしちゃうかもよ？」

なかなか意志を曲げない雄二に、雪冬は肩をすくめながらも反論する。彼とて雄二の幼馴染だ。なぜそこまでして翔子に挑みたがるのか理由ぐらいは分かっている。彼がそれに全精力をかけているということも。

しかし、これは戦争だ。一人の願いの為に全体を敗北に追い込んでしまえば元も子もない。それに、効く限りではこの戦争は明久が望んだことだという。それなら一層彼の独断で決めていいモノではない。

そのため、雪冬はなんとしてもFクラスを勝利に導かなければならなかった。

「大丈夫だって言ってんだろ？　大化の改新が出れば、俺に負けはねぇ」
「あの状況でよく言うよ。問題集の正解率五割だったくせに」
「昔の話だろ？　今は違うさ」
「つい二時間前の話だけどね」
「……」
「……」
「……さて、そろそろあちらさんにも動きがみられるようだぞ」
「……」

誤魔化したね、と呟く雪冬の言葉を雄二は華麗にスルーする。
高橋の呼びかけから五分ほど経ち、Aクラス陣営からようやく四

人目の生徒が姿を現した。

「……先生、私が出ます」

黒曜石のような暗い輝きを放つ長髪。人形のようにすらっとした白磁の肌が、その髪の毛と良い具合に対称となっている。物静かな雰囲気を全身に漂わせる少女が、教室の中心に歩み出た。

Aクラス代表、霧島翔子だ。

「……ラッキー。ここで俺の出番だな」

「うん、ここでゆー君が負けても五分五分だもんね。最後はオレに任せなよ」

「てめぇは普通に人を応援できないのか……？」

「お互い様だよ。もとはと言えば素直に譲らないゆー君が悪いんじゃないか。そんなに応援して欲しいなら、最初から変な意地張らなきゃいいのに」

「へいへい。……ま、とりあえず行ってくるわ。圧勝して戻ってきたときに泣いて謝っても知らねぇからな？」

「無駄口は良いから早く行ってきな。その頭に詰め込まれた答えが抜けていくよ？」

「けっ……相変わらずいけすかねぇ野郎だ」

行ってらっしゃい、という雪冬の言葉に後ろ手を振りながら、雄二はポケットに手を突っ込んだ状態で翔子の前へ。

堂々たる面持ちで現れた雄二に、翔子は少しだけ表情を和らげた。

「……雄二、今日は手加減しない」

「ぬかせ。お前がいつ俺に手加減したよ？　そんな御託は良いからとっとと俺に負けてもらうぜ」

「……望むところ」

双方の間にバチバチと火花が飛び交う幻覚が全員の目に見える。
それほどまでに二人は闘志を沸かせていた。
片や過去の自分と決別するために。
片や目の前の想い人と添い遂げるために。
それぞれの決意を胸に、彼らは相対していた。

「それでは坂本君。教科の指定をお願いします」

若干揺らぎが感じ取れる声で高橋が問う。Aクラスが危機に陥っているのを見て動揺しているのだろうか。Aクラス側からもどよめきが聞こえてきた。
そんな中、雄二は胸を張り大声で叫ぶ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！　とAクラス側に更なる動揺が広がる。

『小学生レベル……？』
『満点確実じゃない……』
『集中力と注意力の勝負になるぞ……』

これで雄二達Fクラス側にも勝機ができる。それが分かったのか、Aクラス生徒達の顔には焦りの表情が見えた。

「小学生レベルなら、問題を用意しないといけませんね。今から作ってきますので、両者は私が戻ってくるまでここで待機しておいてください」

そう言って教室を出ていく高橋。職員室に戻って問題を印刷してくるのだろう。研究熱心な彼女のことだから、きっと小学生範囲もデータを持っているに違いない。

そんな高橋の様子を見送ると、Fクラス生徒達が雄二の方へと近づいてきた。

「雄二、あとは任せたよ」

「あぁ。任された」

「……（ビッ）」

「お前の力にはずいぶん助けられた。感謝している」

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「あぁ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

『負けんじゃねぇぞ、坂本！』

『俺達の全てを託すんだからな！』

『システムデスクをプレゼントしてくれ！』

「もちろんだとも。ここまで皆でやってきたんだ。絶対に勝つさ」

全員が握手を交わし、元の位置へと戻っていく。その間雪冬だけが雄二の元へは行かずに、じっと待機していた。

そんな彼に美波が不思議そうに話しかける。

「時雨、アンタは坂本の所にはいかないの？」

「うーん……行きたいのはやまやまなんだけど……」

「だけど？」

「……ゆー君、多分負けちゃうんだよねぇ……」

「へ？　アンタ、何言ってんのよ。坂本はあれだけ自信たっぷりに言ったのよ？　負けるはずないじゃない」

「そうだと良いんだけど……」

「では試験を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋に促され、二人が教室を出ていく。教壇のパソコンを操作すると前方のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

まず翔子が凛とした表情で入室する。いつもどおりの翔子。自身に満ち溢れ負ける雰囲気など一ミリたりとも感じさせない主席の顔だ。

そして雄二が遅れて入ってくる。野性味あふれたその顔には今や一寸の焦りもない。ただ決められた勝利を掴むために、静かに神経を研ぎ澄ましている。

二人が着席したことを確かめると、日本史担当の飯田が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

『制限時間は五十分。満点は百点です。不正行為などは即失格になります。いいですね？」

『……はい』

『わかっているさ』

『よろしい。それでは、始めてください』

二人の手によって問題が表にされる。

「吉井君、いよいよですね……」

「うん、そうだね。いよいよだ」

「これで、あの問題がなかったら坂本君は……」

「集中力、注意力で圧倒的に劣る以上、延長戦で確実に負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら……」

「うん」

僕らの勝ちだ。

明久が自信満々にそう呟く。周囲の仲間達も同調するように重々しく頷いた。……例の如く、雪冬だけを除いて。

「アンタまだ悩んでるの？　そろそろ素直に坂本を応援してあげなさいよ」

「応援はしてるよ。でも、二時間前まで五十点が全力だったゆー君が霧ちゃんに勝てるとは思えないんだ」

「だから大丈夫だって！　アンタ坂本の幼馴染なんでしょ？　それなら幼馴染らしく心から信じてやりなさい！」

「うん……」

美波に説得されるも、どこか納得がいかない様子の雪冬。

そんな彼の心中を置いて、ディスプレイに問題が表示された。

《次の（　）に正しい年号を記入しなさい。》

（　）年　聖徳太子が遣隋使を派遣

（　）年　白村江の戦いが起こる

「さすがは小学生レベルの問題じゃ……」

「……明久でも答えられるレベル」

「ちょっと待つんだ秀吉にムッツリーニ。君たちは隠しもせずに僕のことを馬鹿にしているよね？」

「馬鹿にしているのではなくお主がバカなのじゃ」

「……同感」

「二人なんて嫌いだっ！」

（　）年　鉄砲が日本に伝わる

（　）年　関ヶ原の戦いが起こる

「問題は……大化の改新は……！」

全員が固唾を飲んで見守る。
そして……

（　）年　大化の改新が起こる

『『『出たぁっ？』』』
「よ、吉井君っ」
「うん」
「これで、私たちっ……」
「うん！　これで僕らの卓袱台が」
『『『システムデスクに！』』』

揃ったＦクラスの言葉。今、奇跡のような勝利にＦクラスの心は確かに一つになっていた。

『『『うおぉおおおおおおおおおおおおおおおおおお？』』』

広いはずのＡクラス教室を揺るがす声。

《日本史勝負　限定テスト　１００点満点》

《Ａクラス　霧島翔子　９７点》
ＶＳ
《Ｆクラス　坂本雄二　８６点》

『『『……へ？』』』
「あーあ……やっぱり……」

気の抜けたようなＦクラスの声。
そんな音声をＢＧＭに、雪冬は呆れたように呟いた。

「でも、これで……」
「アタシ達の出番ってことね？　時雨雪冬君」
「そうだね。オレ達の出番だ、木下優子さん」

誰に言われるまでもなく教室の中央に歩み出る二人。代表の二人が帰ってくるにはまだまだ時間があるが、それほどまでに優子と雪冬はこのときを待っていた。

「貴方を倒して、アタシの虜にしてあげる？」
「それは魅力的な言葉だね。でも、虜にされるのはキミの方だよ、木下さん」

一目惚れ。突然のキス。
ありえない出会い方をした二人が、今ここに激突する。

Ａクラス対Ｆクラス試験召喚戦争

二対二で、最終決戦。

第十一問（後書き）

雪冬「ゆっきーちゃんねるぅ～！」

雄二「……おー」

雪冬「さて、今回も始まりましたゆっきーちゃんねる。司会は私時雨雪冬と！」

雄二「……坂本雄二だ」

雪冬「もうゆー君元気ないよ？　どうせ最初からわかりきっていた結果じゃないか。霧ちゃんと勝負できたからもういいでしょう？男ならいつまでもウジウジしない！」

雄二「そういう問題じゃねぇんだが……つーか、俺がバカみてぇじゃねぇか」

雪冬「馬鹿みたいじゃなくてバカなんでしょ？」

雄二「よしきた雪冬。ちょっと表に出やがれ。お前に礼儀と言うものを叩きこんでやる」

雪冬「いやー！　ゆー君に犯されるー！　助けて異端審問会会長のりょーくーん？」

須川「今から異端審問会を始める」

会員『『『ヒャッハァアアアアアアアア？』』』

雄二「のわっ！　お前らいつの間に！？」

須川「罪状。被告人坂本雄二は霧島翔子と幼馴染と言うただならぬ関係にあっただけではなく、Ｆクラスの良心と名高い時雨雪冬にまで手を出そうとした容疑がある。よって、ここに火あぶりの刑に処す」

雄二「ちょっ……まっ……」

須川「連れて行け」

会員『『『了解？』』』

雄二「須川ぁあああああああああああああああ？」

雪冬「うんっ、お勤めご苦労だよ、りょー君！」

須川「やれやれ、それじゃ俺は戻るぞ？　後は任せておけ、時雨」

雪冬「おーけー。あ、読者の皆さん！　感想、助言、当コーナーへの質問などどんどんお待ちしてるからね？　どしどし送ってプリーズ♪」

雪冬「それじゃ次回、後書きでお会いしましょう」

雪冬「バイニ～♪」

第十二問（前書き）

おはようございます。ふゆいです。
今回も無事に更新。最近調子がいいですよ。
それではお楽しみください♪

第十二問

雄二が情けない敗北を喫したため、二対二の同点となってしまったFクラス。先ほどの勝負で勝ちが見えていただけに、その落胆は計り知れない。目に見えて落ち込んでいる。

そして、そんな彼らを差し置いて時雨雪冬と木下優子は静かに対峙していた。まるで少女漫画のような出会いをした彼らは、それぞれの思いと正義を胸に精神を統一している最中だ。果たしてどのような戦いを見せてくれるのだろうか。

そして、ようやく視聴覚室から雄二と翔子が戻ってくる。

「いやー、完敗だわ。完璧に負けちまったな、俺」

一切悪びれる様子のない雄二。あっはっはと笑う彼の眼には釘バットを用意する仲間達の姿が見えないのだろうか。

怒りに満ち溢れたFクラスを代表して、明久が雄二に話しかける。

「……ねぇ、雄二。ちょっといいかな？」

「ん、なんだ明久。……そうそう、すまねぇな。ちょっとばかし油断していたみたいだわ」

「あははっ、そんなことはどうでもいいよ。今更すぎるしね。それに、僕が雄二に言いたいのはそんな小さいことじゃないんだ」

チラ、と須川達の方へと視線を向ける明久。それに応えるように

クラスメイト達はとてもイイ笑顔でサムズアップ。その青春ドラマと見まごうくらいのリアクションは、白い歯と銀色の釘バットが蛍光灯の光に反射して眩い輝きを放つ幻覚が見えるほどである。

同胞の準備ができたことを確かめ、明久はとても素晴らしい笑顔……ハイライトの全てを消し去った瞳で、怨敵の胸ぐらを掴んだ。

「こんのクソボケェエエエエエエエエエエエエ？　あんだけ啖呵切っておいてこのザマはなんだぁあああああああああああああ？」

「き、急にどうした明久！　目が据わっているぞ！？　それに須川たちもどうして俺に向かってバット構えながら突っ込んでくるんだ！？　しかもそのバット釘が付いてんじゃねぇか！」

「問答無用！　異端審問会会長の名に懸けて貴様を完膚無きまで叩きのめしてやる？」

「「天に召します我らの神よ。ただいまより殺戮を行うことをお許しください」」

「神様に殺しの許可を求めるなぁあああああああああああ？」

「うるさい！　総員、かかれぇえええええええええええええええ？」

「「「ヒャッハア！　レッツ・デストローイ♪」」」

「畜生明久ぁあああああああああああああ？」

もはや自業自得としか言いようのない天誅を受ける雄二を、残された瑞希と美波、秀吉が苦笑しながら見守っている。行いが行いだけに、彼の味方をする気には全くなれなかった。

身ぐるみを剥がされていく雄二を横目に、雪冬は「はぁ」と嘆息する。

「ゆー君のバカ。だからオレが行くって言ったのに……」

「貴方も苦労しているみたいね、時雨君。Ｆクラスは大変でしょ？

バカばっかりで」
「うん、確かに大変だよ。……でも、堅物ばかりのAクラスよりは何千倍もいいと思うけどね」
「……やっぱり、貴方とはここで決着をつけておかないといけないようね、時雨君」
「そうだね。どうする？　『負けた方は勝った方の言うことをなんでも一つだけ聞く』とかいう条件を個人的に付けてもいいけど？」
「望むところだわ。アタシが勝ったら貴方の全てを貰うわよ？　身体も、そして心も」
「心配しなくてもオレは君に惚れてるんだけどなぁ……後はその腐った性根だけかな？　そこさえ直せばもう完璧だよ」

敵を褒めてるのか貶しているのかよく分からないやりとりを交わす二人。なぜだかとても危険な密約が結ばれてしまったようだが、大丈夫なのだろうか。優子が獲物を見るように舌なめずりをしたのは気のせいだと願いたい。
二人の様子をジト目で眺めていた高橋は深い溜息をついていた。教師としては止めるべき場面でも、戦争中は干渉しないという試召戦争のルールがある以上口出しは出来ない。目の前の教え子がどんどん歪んでいく様に、彼女はただ溜息をつき続けるしかなかった。

「……時雨君、それでは教科の選択をお願いします」
「あ、はい。現代国語でお願いします」

それでもしっかり職務をこなすあたりは流石だと言えよう。

「雪冬！　頑張ってねっ」
「……応援している」
「絶対に勝つのじゃぞ！」
「頑張ってください、時雨君！」

「負けたら承知しないからね！」
「おらぁっ！　Ｆクラス魂見せてやれー！」
「転校生でも仲間だからな！」
「勝てよ、時雨！」
「うんっ、皆応援よろしく！　絶対に勝ってくるから！」

いつのまにか雄二の処刑を終えたクラスメイト達が雪冬に向かってエールを送る。色々と突っ込みたい部分はあるがそこはあえて放置しておくのが無難だろう。

Ｆクラスが応援で湧く中、ようやく復活した雄二が覚束ない足取りで雪冬の下へと向かう。そんな彼に気付いた雪冬は、タタタッと走り出した。

三歩程の距離で、二人は足を止めじっとお互いを見据える。

「……」
「……」

五年ぶりに再会した二人。試召戦争中のため落ち着いて話す余裕などなかった。積もる話はたくさんあるが、クラスの勝利を目指して奮闘する方が優先だった。

しかし、それも今日で終わり。勝とうが負けようが、Ｆクラスは戦争から解放される。この勝負が決着すれば五年間の空白を埋めるために話し合う時間もできるだろう。

失われた時間は戻ってこない。だが、これからの時間は創っていける。

雄二はふっと微笑むと、静かに雪冬の方へ右手を握って突き出した。

「……勝てよ、雪冬」
「分かったよ、ゆー君」

コツン、と二人の拳が小気味よい音を発した。

「……さぁてと」

もう、迷うことなんてない。

翔子のこととか、雄二のこととか。そんなことは今はどうでもいい。

ただ、目の前の相手を倒すために。

時雨雪冬は己がすべてをかけて勝負を挑むだけだ。

「それでは、Ｆクラス対Ａクラス最終戦。時雨雪冬対木下優子の試合を始めます」

「「試験召喚！」」

二人の力強い言霊に反応して、足元に魔方陣が現れる。幾何学模様で構成されたそれは、激しい光と共にそれぞれの姿をした召喚獣を生み出した。

西洋鎧を着こんだ二人の召喚獣。唯一の違いと言えば、装備している武器の種類くらいだろうか。鋭く尖ったランスと固く丸みを帯びたシールド。最強の矛と最強の盾が、今ここに相対した。

そして、召喚獣の頭上に二人の点数が表示される。

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　時雨雪冬
現代国語　４０２点　４１５点』

『よ、４００点オーバーだと！？』

『あの転校生そんなに頭良かったのか？』

『いや、この前のＢクラス戦を見た限りじゃコイツ文系教科だけなんだ！』

『教科指定権がここで効いてくるなんて……』

雪冬の予想外な高得点にAクラス陣営から悲鳴に似た喚き声があがる。Fクラスに所属している生徒に点数で負けた。この事実はプライドの塊である彼らの心を揺さぶるには十分すぎるレベルだ。

「……凄いな、雪冬」
「はい。まさかあそこまで高いなんて……」
「とんだ秘密兵器が転入してきたものじゃのう」
「……圧巻」
「アイツ、ホント何者なのよ……？」

そしてFクラス陣営からも驚きの声が上がった。Bクラス戦において世界史で危機を救った雪冬だが、まさかあの時以上の点数を取ってくるとは誰も考えもしなかっただろう。
そんな彼らの反応に、それぞれのクラスの代表は落ち着いた様子で静かに呟いていた。

「そりゃそうさ。なんて言ったって俺の幼馴染だからな。普通じゃないに決まっている」
「……やっぱり、雪冬は凄い。昔も今も、私達の予想を遥かに超えている」

「「……俺一（私）も負けないようにしねぇと（ないと）なぁ」」

小学生時代に致命的なすれ違いをした二人が今まである程度の中を保ち続けられていたのは、ある意味で雪冬の存在が大きい。彼と言う緩衝材があったからこそ、彼らはお互いを見捨てないでここまでやってこれたのだ。雪冬への信頼は他人に理解できないほど固く強いものがあった。

「それじゃあ……行くわよ、時雨君！」

優子は召喚獣にランスを構えさせると腰を低くした体勢で雪冬の召喚獣へと突っ込んでくる。高得点ゆえに、その突進力は目を見張るものがあった。

突然行動を開始した優子。しかし雪冬はまったく慌てることなく盾を操作し彼女の攻撃をさばいていく。

激突と同時に盾を横にずらし、衝撃を逃がすように優子の召喚獣ごと攻撃を逸らす。慌てて体勢を立て直し再度突進を試みるが、先ほどとほとんど同じように華麗な盾さばきで攻撃を受け切られてしまう。

まるで自分の動きがすべて読まれているかのような、無駄のない動き。

【柳に風】ということわざを体現した防御である。まさに【最強の盾】。

それからしばらく攻撃を与え続ける優子。上段、下段、袈裟斬り……多彩な技で攻めていくが、そのすべてが彼の防御の前に崩れ去った。

しかも彼はその上を行き、避けると同時にシールドで打撃攻撃を加えてくる。その嫌らしい作戦に、優子はじわりじわりと点数を失っていった。

『木下優子　３４５点　ＶＳ　時雨雪冬　４０８点』

「どうしたんだい？　Ａクラスの優等生サマはこれくらいでもう終わりなのかな？」

「ぐっ……」

挑発するかのような雪冬の言葉に、優子は悔しそうに歯噛みをする。

圧倒的な戦術を前にして、早くも勝負が決しようとしていた。

第十二問（後書き）

今回は「ゆっきーちゃんねる」はお休みです。
感想がなかなか来ないのでちょっとヘコみ中です（泣）　読んだ方は是非とも感想をお願いしますね？　大歓迎ですので。
それでは、次回もお楽しみに♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6549y/

オレとゆー君と召喚獣

2012年1月4日07時47分発行